
Fate/stay night **とある悪役の話**

郭靖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F a t e / s t a y n i g h t とある悪役の話

【Nコード】

N 4 6 6 9 U

【作者名】

郭靖

【あらすじ】

悪役としての人生が終わって、次はサーヴァントとしての物語か？まあいい。今度はサーヴァントとして、悪役を目指そうじゃないか

今回はゲッターや組合、その他ロボットは出ません。

新しい物語、新しい俺

俺は死んだ。デビルガンダムも倒して、幸せな日々を送って死んだ。確かに幸せな人生かもしれないが、ああ……なんて無駄の多い人生だったのだろう。孫の顔も見た、曾孫の顔も見た。だけど、最終的には悪役にはなれなかった。親友と呼べる男との最後の会話では、俺はよくやったそうだ。けどな、悪役に成り切れないで、死んでからは後悔ばかりだった。

けどな、そんな俺に悪役になれるチャンスくれた奴がいた。その代わりに俺に英霊になれだど、ははは、笑えるぜ。名無しの男が英霊だぜ？誰が得するんだよ。因みにクラスは、弓の騎士^{アーチャー}か騎乗兵^{ライオン}が復讐者だどよ。ライダーとアーチャーになれる理由は分かるけどよ、アヴェンジャーになれる理由が分からないんだよな、アヴェンジャーならアイツの方が合ってるだろうし。

……ん？そろそろ俺の出番みたいだな。さて、俺のマスターは誰でしょうね。テンプレ的に遠坂凛か？それとも間桐桜か？ま、関係ないか。

そして目を開けると、Fate/stay nightの主人公である衛宮士郎がいましたとき。それもたぶん、第一回Vランサー戦の時の。隣を見てみるが、セイバーの姿なんて無い。つまりの事、俺一人でマスターを守らないといけないのか。まあ……いいかさて、マスターが死ぬ。俺が死ぬ。だとしたら簡単な事だ。

「あんたが俺のマスターか？俺はアヴェンジャー、よろしくな」

「え？あんた……誰だ？」

サーヴァントになってから、一度言ってみたかったんだよな。この台詞。さて、ランサーと戦いますか。

「テメエが小僧のサーヴァントか？見た限り、クラスはキャスターだな」

「残念無念また来年でか。ハズレさ、俺のクラスはキャスターじゃないかも知れないし、キャスターかも知れないな」

それにしても、なんで衛宮士郎に俺が召喚されたんだろうね。衛宮士郎の身体の中には、アヴァロンが埋め込まれていて、それを媒介にセイバーを召喚したんだよな。ならなんで、俺が召喚されたんだ？……まあいいか。

「さて、お前には二択の道がある。俺を倒すか、それとも逃げるか。好きな方を選びな」

「じゃあ……テメエを倒させてもらうぜ！」

迫り来る朱き槍。流石はクー・フリーン。動きがいいな。普通の俺なら、一撃で死ぬだろう。けどよ、生憎俺は普通じゃないんだクロックアップよな。何者より速き者、英霊になった時に宝具として扱われたせいかマスターの魔力を吸って、発動する使いにくい能力になってしまったが、マスターの魔力が切れるまでなら、俺の時間が速くなり、何者より速くなる。

続いて、俺自身のスキルである武器召喚を使い、生前よく愛用していた対戦車用バズーカ「パンツァーシュレック」と重機関銃「ホツチキス Mle 1914 重機関銃」、更にライフル「二式小銃」を取り出し、一斉に放射する。間違いなくダメージは与えられないが、もしかしたら与えられるかも知れない。一応俺のクラスはライダーだ。銃弾が魔力を纏ってランサーにダメージを与えられるかも知れないしな。……ゴメン、ホントの事言っと、俺のクラスはアヴェンジャーだ。

「……！？テメエ……何しやがった！」

「さあな」

やっぱりダメージは与えられないか……まあ何者より速き者のお陰か、ランサーは戦略的撤退……てか、逃げていった。次は遠坂凜とアーチャーとの接触か……なら決まりだ。めんどくさくなる前に遠坂凜を殺す。あ、やっぱり止めておこう。色々物語が可笑しくなるのは、余計にめんどくさくなるだけだしな。

……アレ？一応何度も頼りになってきた気配察知（笑）も可笑しくなったかね。なんだか気配が四つ感じられる。……まあいいか。

「マスター、気配が四つ感じられるけど、向かい打つか？それとも戦わないよう交渉してみるか？」

「え？それじゃあ、戦わないように交渉してくれ」

「OK、マスターは家で待っていてくれ」

それにしても、正義の味方を目指すマスターと悪役を目指す男が一緒に戦うのかね。けっけっけ、面白いじゃねえか。暫くの間従ってやるかな。そして扉を開けると、遠坂凜とアーチャー、そして見たことの無い男とセイバーがいた。あーあ、やっぱりこの世界にもオリ主はいるのか。

「ようこそ、衛宮邸へ。俺はあんたらの追っているっていいのかな。とにかく俺はそいつのサーヴァントさ。とにかくお茶でも飲ませてやんよ」

「そ、そう……」

そして上手く遠坂凜を丸めて、衛宮邸へ招いた。オリ主は俺の存在に敵意満開だが、俺は気にしない。

「マスター、連れてきたぜ。お茶でも入れてくれよ」

「ああ、分かった」

そしてマスターの入れてくれたお茶を飲みながら、話を聞く。俺もある程度聖杯戦争の話を聞いているので、意味はないがまあ暇つぶし程度には、なるだろう。そして何故か俺を睨みつけてくるセイバー、なんだか怖いな。まあ…どうでもいいか。そして言峰教会に行くことになった。

「マスター、とつとと行こうぜ」

「ああ……なあアヴェンジャー。俺は聖杯戦争に参加しようと思う。遠坂が言うには、街でガス漏れ事故はホントはサーヴァントが街の人を襲って起こしてるらしい……俺はそいつ等から街の人を守りたい。だから……一緒に戦ってくれるか？」

「けっ、安心しろよ、マスター。俺はマスターに従ってやる。ただマスターは俺に一言命令してくれ」

一度言葉を止めて、マスターの顔を見る。

「どんな時でも、どんな状況でも、どんな戦いでも俺に付いてこいってな」

「……ああ、どんな時でも、どんな状況でも、どんな戦いでも俺に付いてこい、アヴェンジャー！」

そうかい、そうかい。いやゝよかったよ。カッコつけたのに、マスターに断られたらどうなるかと心配した。また悪役として活躍できないかも知れんが、今回は傍観者で正義の味方の仲間でもいいかね

狂戦士と少女、手綱と俺

さて、言峰教会に来たのはいいいもの、この後は第一回VS狂戦士戦なんだよな。俺の宝具も武器もバーサーカーに効くか分かんないんだよな。一番いい方法として、イリヤスフィール・フォン・アインツベルンを直接殺すのが、一番良いだろう。

問題はマスターがそれに賛同してくれるかどうかだ。俺はマスターを護るため（生き残るため）には、マスターの知り合いを殺そうが、他人を殺そうが、マスターの家族を殺すんだが、生憎俺はしないないサーヴァントだ。マスターの命令は聞かなくちゃならないんでな。マスターがそれを拒んだら、それで終わり。どうなるかは、分からないのさ。

「アヴェンジャー、貴方は聖杯に何を望むんですか」

かっかっか、まさかセイバーから話掛けてくるとはね。にしても聖杯に何を望むかね……実際俺には確定した願いなんてないんだよな、悪役には聖杯の力なんか借りないで、俺自身がならないといけないしな。

それに聖杯はアヴェンジャー（旧）のせいで、邪悪になってるらしいからな。願いを持っていたって、意味はない。……さて、どうかえすか。俺には、二択の道がある。一つ目は、聖杯の事全てを話し、セイバーを丸め込む。二つ目は、嘘の返答を答える。どうする……。

「…………俺の願いは俺が死んで残った家族がどうなってるか聞くことだ」

「そうです「おつと悪いな、まだ続きはあるだ」…………話を割ってしまってますいせん」

ホント、コイツは礼儀正しいよな。オリ主のサーヴァントじゃなくて、家のマスターのサーヴァントになってくれればいいのによ。

「でもよ、実際問題聖杯に頼んだって、意味はないだよ。あいつらなら元気でやってるだろうし」

「……ありがとうございます」

そして暫くして教会から、マスターとオリ主、遠坂凜が出てきた。全く持って、オリ主にはいい加減自重して欲しいな。オリ主は悪いことしてるつもりはないだろうが、こちらら物語が狂うと、厄介でしかないんでな。

三人のマスターと三騎のサーヴァントが一緒に帰っていると、遠坂凜が急に止まり、こちらを振り向く。

「衛宮君、いい、貴方とはココまでよ」

「え？どういう意味「マスター、簡単に言えばこれからは敵同士だつてことさ」……！遠坂、俺はお前と戦いたくない。どうにからないのか？」

「無理ね。これは戦争なのよ。手を取り合って戦うなんて、無理に決まってるわ」

こりゃあ遠坂凜の言うことの方が正しいな。戦争は殺すか、殺されるかの世界。手を組んでも、裏切る奴もいる。裏切られ殺されるくらいなら、最初から自分一人で戦った方がマシだ。

おっと、そろそろイリヤスフィール・フォン・アインツベルンとバーサーカーが来る時かね。間違いなく俺では、バーサーカーに勝てない。マスターを庇う所か、たった一撃でマスターと一緒におだぶつにしかないしな。

「こんばんは、士郎、遠坂凜」

「……！この間の……」

さて、やっと出てきたか。バーサーカーとイリヤスフィール・フォン・アインツベルン、マスターには悪いが、ココはマスターを連れて、逃げさせてもらおうか。

そしてマスターとイリヤスフィール・フォン・アインツベルンの会話は少し続き、結局戦う事になった。戦わなければ、戦わないでよかったんだけどな。

「マスター、はつきりと言うぞ。俺は弱い。肉弾戦では、間違いない、マスターにも負けるし、下手をすれば、ナイフを持った子供にも負ける。そんな俺が肉弾戦でバーサーカーに勝てる可能性は0%を超えて、-100%の確率で負ける。ついでに言うと、魔術も使えないし、バーサーカーに有効そうな遠距離武器も無い。この意味は分かるな、分からなかったら俺はマスターを永遠に馬鹿認定するぞ」

「…………絶対には勝てないって言いたいのか？」

「大当り、と言う訳で逃げるぞ、マスター。バーサーカーは遠坂「そんなのは駄目だ！そんなのは正義の味方のすることじゃない！」

…………了解、それじゃマスターには、しっかりと俺の手綱を握って貰おうか」

残念だね、マスター。俺は正義の味方なんかになれないサーヴァントなんでね、卑怯だろうが、悪だろうが言われようとも、戦わせてもらうぞ。

クロックアップして、イリヤスフィール・フォン・アインツベルンの後ろに回り、銃を撃とうとするが、マスターに取っても、俺に取ってもいい案が思いついた。イリヤスフィール・フォン・アインツベルンをマスター、隣に移動させ、頭にホッチキス Mle1914重機関銃を突き付ける。そしてクロックアップを解除すると

「……!？」

「さてと、お嬢ちゃん、交渉の時間だ。このまま俺に殺されるか、それともマスターと手を組むか選びな。勿論マスターと組むなら、命は「止める!アヴェンジャー!」りっ!」

「……マスター、あのよう、いつ令呪を使おうと俺は文句言わないが、なんで相手マスターを助けるために、令呪を使うんだよ。」

「……貴方馬鹿なの?私を助けるために令呪を使うなんて」
「えっと……思わず使った」

「あーあ、畜生。………まあ………いいか。マスターが満足なら文句は言わないぜ、俺は。ただよ、状況を少しは感がえようぜ。」

「今日の所はこの辺にしといてあげる。だけど」

イリヤスフィール・フォン・アインツベルンは一度間を取り、こちらを睨んだ。おー怖い怖い、気が利く女ったらしなら、君には笑顔の方が似合うぜとか言うんだろっが、俺は愛する人がいるから、そんなこと出来ないんでな

「………なあ凜、話がある。こっち来てくれ」

「?何よ………なっ!?!それマジなの!？」

「ああ、大マジだ」

何を話してるかは、知らんが、俺とマスターを巻き込まない話だといいな。まあ巻き込まれたって、マスターが承諾すれば、俺には拒否する権利はないんだがな。

「マスター、俺はやることがある。先に帰っててくれ」

「ああ、晩飯までには、帰ってこいよ」

よし、マスターの承諾も得た。さてと、これで実験ができるな。

狂戦士と幼女、手綱と俺（後書き）

やっぱり、政利は書きやすい

馬鹿降臨、同盟を組む

さて、実験を始めるとしようか。俺の宝具は合計で二つ、一つ目は何者より速き者だ。クロックアツプこいつは燃費は悪いが、お陰でランサーを撃退？することが出来た。そんなのもう一つは「我が友の隣に」これはそのまま日本読みで「わがものとなりに」だ。能力は簡単、俺が生前一緒に戦っていた奴を呼び出し、一緒に戦う。こいつは不思議な事に呼び出す奴が大量の魔力持ちだったら、魔力を払わなくていい優れものだ。因みに大量の魔力持ちの人間の知り合いなんて俺にはいない。

だけども、人間じゃない大量の魔力持ちはいんだよね……そいつの名前は裕猫、正式名称「メタトロン」。こいつは天使で、反逆者で、俺の仲間だ。まあ天使つつつても、天使の能力は反逆した時に封じられて、残るのは、天使だった頃の名残りの異様にでかい羽一（出し入れができる）と、異様にでかい……と言つか、でか過ぎるカブト虫「カブトー」、そしてたった一人でこの世界の魔術師全員分をまかなえる程の大量過ぎる魔力がある。本題に戻ると、俺の目的は「我が友の隣に」の実験をする事だ。まずは大量の魔力を持つ裕猫を召喚しよう。

「来い！我が友メタトロン！」

因みに呼ぶ時は、相手の本名じゃないといけないらしい。そして空間は歪み、徐々に……じょ……じょに……ごめん、今更だが凄い後悔……理由？それじゃあ聞こう。異様にでかいカブト虫に乗った猫と異様にでかいクワガタムシに乗る雌猫、そして異様にでかいカナブンに乗る猫を呼ぶのと、それを呼ばないのどっちがいいか？

「行けええええええええええ！！！！カブトー１！ダイナミックタツクルううううう！！」

「こつちも行くぞおおお！！！！クワガー2！大斬りバサミ
 いいいいいいいい！！！！」

「ORETAIMOMAKENAI ZO! !KANABU-3!
HURUPAWA-KAMINARIO SIIIIII!
」

……これまで、こんなに後悔をした事はない。てか、ココまでやったら、サーヴァント達が出てくるんじゃない？……はははは、死ぬ事しか想像できねや……

「おいおい……なんだこりゃ？」

「俺が知るかッ……！」

なんだかランサーが出てきたけど、もうどうでもいいや……。ランサーがああ馬鹿共をかたずけてくれないかな……。あの馬鹿達はまだ少し暴れないと、止まらないだろうし……。

ランサーはもう知らん、と言わんばかりに後ろを向き、去っていった。……あり？あの馬鹿達、俺の方向に突撃してきてない？……あはははは、マジでどうしよう。

「馬鹿猫！こつちを向け！お前は俺を殺すつもりか！」

「……！その声はまさっちゃん！どうして」「に！」

マジで気付くとは……。まあいいか……。近づいていく馬鹿猫、その顔は何故か誇らしげで、かなりム力つく。よし、殴ろう。そして裕猫達を殴ると、馬鹿猫達は泣いていた。

「ひでえ……ひでえよ！ まさっちゃん！」

「五月蠅い。この馬鹿猫が、少しは自重しろ」

裕猫達は泣いてるが、俺は気にしない。それよりも、裕猫を召喚できたんだ。だとしたら、コレからの戦いの戦術が増えることになるな。裕猫達は基本的に遊撃兵として活用しようか……それとも偵察兵代わりにしようか……まあ、その場次第で裕猫達の運用方法は変えるのが、いいか

その後、裕猫達を元の世界に帰し、マスターの家、つまり衛宮邸に帰ることにした。勿論、非実体化してな。そして衛宮邸に戻ると、何故かセイバー＆アーチャーに出くわした。

「よつす、お前らなにしてんの？」

「いや、凜が君のマスターとセイバーのマスターと同盟を組むらしいからな。だから私も仕方なく、ココにいるのだ」

ほう……そうか。てか、やっぱ、マスターは同盟を受けたのか……。元々、俺は指揮官っぽい役割に居たからな。使える駒が多いと俺も嬉しいが、問題はオリ主だ。アイツは言わば、もう一人の指揮官。戦場に指揮官が二人も居ると、兵士達に混乱を招く。だとすると、俺が駒になるか、それともオリ主を駒にするかのどちらかな。

「それよりも……アヴェンジャー、君は何者だ？」

「俺が誰かって？ 普通、敵に教えるはず無いだろ」

……アーチャーは俺の存在を怪しんでるのか？ まあそうだろうよ、でも俺に答える義務は無い。理由は勿論、敵だからだ。……だけど、それもあるが、俺自身も別世界の転生者が英霊になりましたなんて、言えないからな。

それに俺自身も、俺が一つのSSのキャラクターじゃないかと考えてる。あのオリ主が主人公の作品の唯一の異質で変質な男。あの

男の言い成りにならず、あの男から反逆しようと、企んでる悪役……てか？ かつつか、マジで笑えないな。ホントありそうだ。

「じゃあ今度は俺からの質問だ。アーチャー、セイバー、お前らはセイバーのマスターをどう思う？」

オリ主に魅了されているか、魅了されていないか、分かるこの質問。魅せられているなら、女なら素敵や永遠の愛を誓っても良いですとか、ツンデレっぽい事を言うのだろう。男なら、信頼できる奴、あの様な男になりたい、とか言うかも知れない。

「私はとても素敵なマスターだと思います。何故だか分からないんですが、マスターならこの身を捧げても、いいような気がするんです」

セイバーは駄目だな。まあ Fate 作品の殆どで、セイバーはオリ主のハーレム要員の一人だ。身超されているのが、当たり前だと言って良いだろう。

「私は……何故か分からないが、とてつもなく恐ろしく感じる……。普通の魔術師が持てる筈、無いほどのあり得ない位の、大量の魔力を持ち……ありとあらゆる力を擦じ伏せるその力に嫉妬してるかもしれない……」

……どうやら、アーチャーはまだ魅了されていないみたいだな。反逆の駒として、使えるかもしれない。あと魅了されていないっぽいのは、マスター、間桐慎二、アーチャー、イリヤスフィール・フォーン・アインツベルン、バーサーカー、ランサー、……駒として使えそうなのは、これくらいかな？ え？ ライダーは使えないのかって？ 駄目駄目、アイツは美人だからな。どうせ、オリ主に魅了される

だろ
うし

卑怯と暗躍、策略と同盟

さて、マスター達はもう寝たか。流星のオリ主も寝ているな。人間の三大欲求、性欲、食欲、睡眠欲には流星のオリ主も耐えられるはずないな。……いや、オリ主は寝ているんじゃないみたいだな。三大欲求の性欲を満たしてるみたいだ……。……どうでもいいか……。そして俺はゆっくりと外に出る。

「何処に行くのだ？アヴェンジャー」

後ろからする声、驚いた俺はすぐさま振り向き、話しかけてきた相手を見る。そこに居たのは、アーチャーだった。はあ……。ばれたか。コレで作戦は失敗かな？

「アーチャーか……。何の用だ？」

「なに、君が何をするか、気になっただけさ」

成る程……。あくまで目的を言わないつもりだな。まあいい、ココでアーチャーを勧誘するのも一つの手か……。さて、どうする？俺は生憎誘い文句とかも持っていない。だとすると、アーチャーを仲間にするような、手駒も、道具もない……。諦めるか？だとすると、こっちの暗躍が意味がなくなり、アーチャーに無駄な不信感を植え付けることになる……。なら……

「何、マスターがアレだから、こっちの目的もスムーズに進まなくてね。だから、多少ながら暗躍しようと思ったのさ」

「暗躍……？」

「そ、暗躍。俺の目的は簡単、悪役になる事さ」

それを聞くと、何故かアーチャーは笑いを堪えるようにする。そしてアーチャーは突如笑い出した。数分間笑い続け、こちらを振り向いた。その顔は何故か、嬉しそうに見える。

「正義の味方を目指すマスターとは、対極のサーヴァントとはな。すまない、つい笑ってしまった」

「俺もお前が笑ったのは驚いたよ」

なんでだろうな……。気付いたら、俺は玄関の前に胡坐を掻いて、アーチャーも座っていた。そして二人で語り始める。なんで自分達は英霊になったのか、自分のマスターの好きな所、嫌いな所、そしてあのオリ主のことを語り始めた。

「……………なあ。俺の話を聞いてくれるか？」

「内容次第だな」

内容次第か……。まあいいか。さて、問題はココからだ。どうやってアーチャーを仲間に引き入れるか……。もっとも遠坂凜がオリ主に魅了されたら、そこで同盟が終わる可能性があるんだがな。

「この話は、信じたくなかったら、信じなくてもいい」

「……………」

黙るアーチャー。そして俺はゆったりと話始めた。

「俺は別世界の英霊だ」

「……………！」

驚くアーチャー。その顔はあり得ないと言いたそうだった。まあどうでもいいか。そしてアーチャーに一礼して、その場を去った。

さてと、魅了されるはずがない奴から仲間勧誘を始めるか。一番の候補として、間桐慎二かね。走りながら、俺は考えた。と言うか、考えてしまった。なんで俺はココまでしているんだ？マスターのため？悪役になるため？何故だろう……まあいいか、きつといつか分かるだろう。

そして間桐慎二が居そうな場所……と言うか、学校に来了。理由は簡単、原作では、ライダーの宝具『他者封印・鮮血神殿』ブラッドフォート・アンドロメダを発動させるにピッタリな場所が学校だ。内部の人間を溶解し魔力として使用者に還元する赤い結界を張る対軍宝具『他者封印・鮮血神殿』ブラッドフォート・アンドロメダを発動させるには、人が集まる学校はピッタリだからな。そして学校についた。さてと、間桐慎二はどこかね。学校を歩き回っていると、ライダーらしき女を見つけた。出来るだけ、気配を消し、ライダーの跡をつける。……どうやら、俺に気付いてないみたいだな。理由としては、間桐慎二の相手に疲れて、俺に気付いてないか。それともオリ主に魅せられ、能力が半減しているのか？まあどうでもいいか。

「ライダー、遅いじゃないか。僕を待たせるなんていい度量だな」「すいません……ですけど、本当にコレを実行しないとイケないんですか？」

どうやら、もう間桐慎二の居場所に来れたみたいだな。

間桐慎二はライダーが来るのが、遅かった事に非常に怒っており、ライダー自身は何か、考え事をしており、間桐慎二の言葉を聞いちゃいない。ライダーは再び、宝具の設置をしてくると言い、間桐慎二から離れた。さて、我が友の隣にを使い、裕猫を呼び出し、裕猫を頭の上に乗せる。なんで裕猫を呼び出したかと言うと、裕猫には俺のボディーガード代わりになってもらう。コイツはギャグ補正を持ってるらしいからな。盾代わりには、なってくれるだろう。

間桐慎二が俺達に気付く前に一発弾丸を間桐慎二の横にある花瓶

目掛けて、撃つ。ライダーの機動力なら、銃声が聞こえた瞬間、間桐慎二の所に飛び込んで来るだろうが、何故か来ない。そして間桐慎二の目の前に移動し、銃を間桐慎二に突きつける。

「な、なんだ！？お前は！？」

ちっ、五月蠅いな。もう二、三発、銃を撃って、黙らせようかね？まあどうでもいいか。

「話を聞きな。生きて帰りたかったら、俺の言うことを聞きな」

間桐慎二は黙って、首を縦に振る。そして銃を突き付けながら、俺は用件を言った。

「俺の目的は、お前と同盟を組むこと、そしてこの結界型宝具解かせる事だ。これさえ護れば、俺はお前に手は出さない。護らなければ、俺は銃の引き金を引くだけだ」

「なんで僕がそこまで……」

ほう……どうやら、命が惜しくないみたいだな。引き金を引こうとすると、間桐慎二の態度が急変し始めた。

「分かった！同盟も組むし、宝具も解かせる！だから命だけは、助けてくれ！」

「そうか、言い忘れてたが、もう一つ、約束してもらおう。俺が命令した時、命令した相手と戦ってくれ」

やはり、少々渋る間桐慎二だが、引き金を引こうとすると、急いで俺の要求に分かったと答えた。

さて、俺の目的は終えたし、次はどうするかね。そんな事を考え

ながら、歩き回っていると朝になった。仕方ないな、家に戻るか。
そして家に戻ると、遠坂凜がオリ主こと、獅子王木杯斗はいとの事を滅
多殴りにしていた。

「おい、なにしてんだ？」

「五月蠅いわね！黙ってなさい！」

……まあどうでもいいか。

オリ主対俺、最強対最弱

さて、マスターも起きたことだし、暗躍フェイズも一旦、終了。

退屈って感じではないが、本当に暇だ。一応俺は、サーヴァントだから飯も喰う必要がないし、寝る必要もない。だから暇なんだ。生前なら麻衣子の作ってくれた飯を喰ったり、美雲と秋宗と遊んだり、色々しないといけない事があったから、暇ではなかったけれど、こうサーヴァントになると、本当にやることがないな

そして暇なので、家の周りを歩いていると、オリ主に出会ってしまった。オリ主は、今朝、遠坂凜に顔を殴られていたせいか、顔が腫れているように見える。そして、オリ主は俺の存在に気が付いたのか、俺に近付いてきて、親しげに、何年らしいの親友の様に話しかけてきた。

「なあアヴェンジャー、アンタはなんで聖杯戦争を戦うんだ？それと聖杯に何を願うんだ？」

昨日、セイバーからも聞かれた質問と、聞かれたこと無い質問。後者の質問は、セイバーに聞かれたのと、同じ答えにするとして、前者はどうするかね。

そしてまずは後者を、昨日、セイバーに言ったように言い、前者をどうするか、考える。なんで俺は戦うのだろう。悪役には、ないだろうし……。まあどうでもいいかね。

「戦う理由なんて無い。俺はサーヴァントだからな。マスターの命令を聞くだけだ」

「……なあ、戦う理由を無いなんて、寂しすぎないか？お前さえ、良ければ、俺はお前の戦う理由と夢を探すのを、手伝ってやるぜ」

……ハア？コイツ、馬鹿なのか？俺は確かに戦う理由はないが、戦う理由を探す程、聖杯に興味なんて無い。それにこのめばりついた様な、嫌な感覚は、転生者の物だ。

それにコイツは、ただハーレムを作りたいだけじゃないのか？……ああ成る程、コイツはただマスター……と言つか、衛宮士郎アンチ、もしくは衛宮士郎をヘイトしたいだけだな。マスターの仲間と呼べる存在を自分の仲間にして、マスターを一人、孤独にさせるのが、目的かね。

「それにアヴェンジャー……お前のマスター、衛宮士郎は正義の味方になるって言ってるけど、そんなのは絶対に叶わないに決まってる。この世界は誰かの犠牲で成り立ってた。だから一人残らず、幸せにさせるなんて、悪の存在しない世界を造るなんて無理に決まってる。だから士郎を捨てて、俺と一緒にこう」

……絶対に夢は叶わない？無理に決まってる？そうかい、そうかい、無理なのね。つか、マスターは知らんが、俺は衆生救済なんて叶えられない事なんて、とうの昔に分かってる。だけどマスターが無理だと分かっているって、衆生救済を願うなら、俺はそれに付き合うしかないんだよな。だって、俺は、マスターの、サーヴァントだからな。

「悪い。俺はマスターのサーヴァントなんだ。それにマスターを裏切るなんて、俺には、出来やしないんだよ、転生者」

「……！アヴェンジャー、お前もまさか……」

「そう、アンタの思ってる事は、大当たりさ。一応、俺も転生者。最も」

最も元転生者だがな、と言いつ切る前に、直径1m程の日本刀が、俺を切り裂かんと襲い掛かる。襲い掛かってきたのは、勿論の事、

オリ主だった。

襲い掛かる日本刀。だが、避けられない程ではない。軽く右に移動すると、日本刀は大きく空振り、床を切り裂く。

「危ないな。俺じゃなかったら、普通の人間は死んでた所だぞ」

「黙れ！悪が！お前は俺のハーレムを奪いに着たんだな！殺してやる！」

………はあ。転生者だって分かった瞬間、掌返しかよ。それに俺はテメエのハーレムなんかに興味なんぞないっての。……めんどくせえ、どうでもいいか。

「杯斗！どうしたの！？」

「凜！全部、毘だったんだ！ランサーとの戦いも、バーサーカーとの戦いも、同盟も、全部毘だったんだ！俺達を殺そうとする、衛宮士郎の毘だったんだ！」

「おいおい、マスターは関係ないぜ。全部、俺一人で行った事だ。マスターに罪をなすり付けんじゃねえよ」

せめて物の償いだ。マスターの罪を俺が被つところ。そうすりゃ、俺の悪役度が一気に上がって、ついでにマスターを助けられる。まさに一石二鳥だな。

そして遠坂凜は、自らの武器である宝石を構え、オリ主は日本刀を握り締め、俺に襲い掛かってくる。最弱の俺に、本気で戦いを挑むなんて、馬鹿がすることだ。公式ではサーヴァント一体は、戦闘機一機分の力があるらしいが、俺や第三次聖杯戦争のアヴェンジャ―は二人合わせても、人間一人に勝つのが、やっとだ。因みに銃を使わない前提で話している話だ。

「ま、どうでもいいか」

そう言葉をもらし、俺はクロックアップして、逃げる。はあ、今日からどうしょ。キャスターの所で、サーヴァントもどきでもやるうかね。

士郎 SIDE

「アヴェンジャーが裏切った!？」

杯斗から、聞く話しは衝撃の連続だった。杯斗が言うには、アヴェンジャーは元々、裏切る前提で、俺のサーヴァントをやってたらしく、時期が着たから、裏切ったらしい。

どうにも俺には、信じられない。たった二日だけど、俺はアヴェンジャーを信頼してたんだ。だから、どうしてもアヴェンジャーが裏切ったなんて信じられなかった。

「士郎、令呪を使って、アヴェンジャーを呼び出すんだ。アヴェンジャーが現れた瞬間、俺、凜、セイバー、アーチャーで一氣にアヴェンジャーを潰す」

「ちよつと待つてくれ!少しでいいから、時間をくれないか？」

俺には、どうしても、アヴェンジャーが裏切ったなんて、信じられない。確かにアイツは女の子を殺そうとしたり、したけど……。それに裏切るんだったら、アヴェンジャーは俺に呼び出されたばかりだ。それに呼び出される前に、ランサーと手を組めるはずが無い。あの子にしたってそうだ。呼び出された直後に、あの子と同盟を組めるはずが無いし……

「それもそうだな。一日待ってやるよ。一日でアヴェンジャーが裏切った事を認めな」

「……………ああ」

……………取り敢えず、学校に行こう。少しは気が晴れるかもしれない。

俺とアヴェンジャー、俺とマスター

サーヴァントの急襲も、大きな事故も無く、学校に来て、学校が終わった。でもこうしている間にも、時間は刻々と迫っている。杯斗は一日、考える時間をくれたけど、どうすればいいのかわからなかった。誰かに相談したい。遠坂に相談しても、アヴェンジャーを殺せって言うだろうし、杯斗も同じ事を言うだろう。他にこの事を相談できる人が何人いるだろう。あの女の子は？……駄目だ。どう考えても、会った瞬間に殺される。あの神父は？……こつちも駄目だ。相談した瞬間、令呪を奪われそうな気がする。

「よっ、そんなしけた面してどうしたんだ？」

この声は……美綴か……

「なんでもないさ」

「嘘つけ、何か隠してるだろ」

適当な事を言って、誤魔化そうとしたけど、逆に嘘をついてるとばれてしまった。どうやって誤魔化す？

……誤魔化すのは、止めよう。ある程度、名前とかは伏せて、美綴に事情を話してみよう。そうすれば、気が少し、晴れるかも知れない。

「なあ美綴」

「なんだ？」

俺の言葉に美綴が答える。

「仲間だっと思ってた奴が、実は敵で、自分はまだ事情があるんだと、思ってるけど、他の仲間がそいつを殺せ、殺せって言うて着たら、お前は どうする?」

取り敢えず、適当で、ある意味正確に話してみた。美綴、お前は どう答えるんだ?

「私はまだ信じてるなら、私はそいつを殺さない。それと、密会でもなんでもして、なんで裏切ったか、理由を聞くな」

……… そうだよな。美綴の言う通りだ。信じてるなら殺さない。何をしたって理由を聞く。そうしよう。何たって、俺は、アヴェンジャーの、マスターだからな。

美綴に礼を言っ て、この場から立ち去る。よし、遠坂はまだサーヴァントの探索とかがあるから、夜まで家には帰らない。杯斗はなにかの用事があるらしいから、夜まで帰らない。だったら今がチャンスだ。家に帰って、令呪を使ってアヴェンジャーを呼び出して、真相を聞く。行けるな。

そして家につくと、直ぐにアヴェンジャーを呼び出す準備をする。そして準備が終わると、息を整え、目の前をしっかりと見る。そして

「来い……! アヴェンジャー!」

時計をイメージする丸と長い棒の様な痣……つまり、令呪が光って、俺の目の前に、現代風な格好で黒い髪、黒い目のサーヴァント、アヴェンジャーが姿を現す。その目はなんだか、呆れている様なイメージが伺えた。

「アヴェンジャー、本当にお前は裏切ったのか?」

アヴェンジャーはしっかりとこちらを向いて、呆れたような、声で言った。

「違うに決まってるだろ。コノヤロー」

アヴェンジャー SIDE

さて、マスターと別れたが……マジでどうしよう。一応、単独行動のスキルを持つてるから、二、三日の間は、大丈夫だけど……それ以降が問題なんだよな。

「ん？アイツは……」

イリヤスフィール・フォン・アインツベルンと……オリ主か？二人共、なんか楽しそうだな。恐らく、オリ主がフラグ建設中なんだろうよ。オリ主は俺の存在に気づいてはいないな。今の内に逃げるのが、得策かね。

「うん……りがと……でも……」

……なにか話しているな。話を聞く限り、うん、ありがとう、でも、は聞こえるな。コレだけで話を予測するのは、不可能。てか、予測する意味はないな。

と言う訳で、俺はそのままその場から、去った。そして暗躍することも無いので、時間を潰していると、いきなり何かが俺の身体を包み、何処かに飛ばされた。

そしてゆっくりと目を開けると、マスターがいた。周りを確認するが、オリ主と遠坂凜はいない。マスターはあの二人の命令で動い

ていないと言う訳か。と言うか、なんで裏切ったかも知れない相手
を呼び出すんだよ。

「アヴェンジャー、本当にお前は裏切ったのか？」

いきなりのマスターからの質問、裏切ったのか、裏切っていない
かの質問。この答えに俺はしっかりとマスターの方向を向き、呆れ
た声で言った。

「違うに決まってるだろ。コノヤロー」

思わず、違うと言ってしまった。それが俺にどんな影響があるか
は、分からない。けど思わず、言ってしまった。

何故、言ってしまったのだろう。………そうだな。一応、俺は軍
師（仮）なんだから、使える駒は一つでも、多い方がいいからな。

「………それじゃあ、なんで杯斗はアヴェンジャーが裏切ったなんて
言っただんだ？」

「アイツの邪魔になっただからだろ」

マスターはそれを聞くと、何か考えている顔をしている。そして
マスターは、意を決する様な顔をして、こちらを向いた。

「なんで杯斗はお前の事を邪魔だと思ったんだ？」

「さあな？俺自体も分からないな」

それを聞くと、マスターはまた何か考えている様な顔をしていた。
全く………めんどくさいな。そして時間が経ち、夜になると、誰かが
帰ってきた。足音からすると女と男。女が先に歩いてるから、
恐らく遠坂凜だろう。ならいくらか方法があるな。

「ヤバい！誰かが帰ってきた！アヴェンジャー！何処かに隠れてくれ！」

「マスター、無駄だ。隠れるにしても、隠れる場所が無さ過ぎるかな」

ガラツと、扉を開ける音がすると、遠坂凜とアーチャーがいた。その顔は、焦りを見せているようだが、何処と無く落ち着いているように見えた。

「こんな所にいたね、衛宮君、アヴェンジャー」

「遠坂！？えつと…あの……」

焦るマスターを無視して、遠坂凜はマスターの手を握り、マスターの顔をじつと見つめ、アーチャーは扉の方向を向いた。

「杯斗から同盟を切って、私と同盟を組んで！」

「は？」

その瞬間、扉を開けず、その扉を破壊する者が現れた。それは俺の良く知るかもしれないサーヴァント、そのクラスは

「久しぶりですね」

「ッ！ライダー！なんでお前が！」

突然の襲撃者は、マスターと遠坂凜を狙うように、走り、マスターの喉をつかみ掛かる。仕方ないな、クロックアップを使う……！クロックアップを使い、周りの時間を遅くし、パンツァーシュレック、ホッチキス M1e1914 重機関銃、二式小銃を一気にライダーへ撃った。

俺VSライダー、アーチャーVSオリ主（前書き）

この頃、スランプ気味

俺VSライダー、アーチャーVSオリ主

さて、効果的なダメージは与えられないだろうが、牽制くらいにはなるだろうと思って撃ったが、傷一つ付かないとは……まあ仕方ないな。俺は最弱のサーヴァントなんだしな。てか、現代兵器メインの戦いの俺の場合、殆どの攻撃はサーヴァントに聞かないんだよな。ホント、困った。困った。

なんて言っと、思ったか。確かに、俺はサーヴァント的ステータス是最弱だぜ。だけど、人間的ステータスだと速さだけは、誰よりも速いんだよな。まあ簡単に言えば、回避性能と逃げ足だけは、一番なんだよな。と言う事で、クロックアップを使って、マスターと遠坂凜、アーチャーを抱き上げ、逃げる。

そして適当な隠れられそうな場所に着くと、マスターと遠坂凜、アーチャーを降ろし、クロックアップを解除する。……？なんで遠坂凜は寒そうな表情をしているんだ？……ああ、クロックアップが速すぎるからか。

「あ、あ、ありがと。アヴェンジャー……」

「どういたしまして、それよりもなんでライダーはお前らを狙ってんだ？」

まずは直接な理由を聞く。疚しい理由が無いなら、直ぐに答えられるはずだ。そして遠坂凜は重々しくその口を開いた。

「杯斗に裏切られたのよ……」

凜 SIDE

アヴェンジャーが裏切った……。予想外の誤算ね。一応、杯斗と

の予定では、衛宮君に令呪を使ってもらって、アヴェンジャーを呼び出す。その後、アーチャーとセイバーでアヴェンジャーを倒すって予定だけど……それよりも私としては、気になる事があるわ。

アーチャーもそれに疑問を抱いてみたいだし……杯斗に聞いた方がいいわね。杯斗は……と居た。セイバーと剣術の訓練か……なんだか、杯斗らしいはね。

「ねえ、杯斗。なんであんたはアヴェンジャーが裏切ってるって分かったの？」

「はあ？そりゃ決まってるんだろ。俺だからだよ」

はあ？確かにこいつとは、幼馴染だけど……時々、私でもこいつの言動と行動には、意味が分からない時があるのよね。だから俺だからとか言われても、分からない部分があるんだけど……。

「ねえ、もう少し詳しく、教えてくれない？」

「だから俺だから分かったんだよ」

……………。

「いい加減、ちゃんと答えてくれない？なんであんたはアヴェンジャーが裏切ったって分かったの？」

「だから俺だからだつてつってんだろ」

……………どうやら、意地でも本当の事を言いたくないみたいね……。だったら簡単よ、こっちは杯斗の言動と行動の矛盾を突いて、本当の事を聞き出せば、言いだけの話よ。

「ねえ質問だけど、召喚されたばかりのアヴェンジャーが召喚される前にランサーと手を組んだり、召喚されてから、私達とずっと居

たのに、なんでアインツベルンと同盟を組めたの？」

「さあ知らねえよ。あんなくそ野郎の思考なんて分かる筈ないだろ」

……なんかムカつく。アヴェンジャーの事なんか関係ないけど、
なんだか馬鹿にされている様でムカつく。……実はコイツ、裏切ったか、裏切っていないか、分かってないじゃないかしら。

……分かってない？……もしかして、杯斗はアヴェンジャー……
いや、あの時、杯斗はアヴェンジャーの事を裏切ったって勘違いしてたの？そしてアヴェンジャーは衛宮君に被害が出ないように憎まれ役を買って出た……。そうすると、なんでアヴェンジャーが裏切ったと言ったのか、理由が分かるわね……。だとしたら後は……。

「杯斗！今すぐアヴェンジャーを探しにいくわよ！」

「はあ！？なんであんな奴を探しに行かないといけないんだよ！」

「あんたはアヴェンジャーを裏切ったって勘違いしただけの可能性が大きいのよ！それだと私達は無駄に戦力を一つ失った事になるのよ！」

まあ能天気な杯斗の事だから、直ぐに何！そうだったのか！？とか言つて、アヴェンジャーを探しに行くでしょうね。だけど、私の予想は直ぐに裏切られた。

アーチャーが実体化すると、持っている双剣で鉄の様な物を防ぐ音が聞こえたの。私は誰かが攻めてきたと思ったんだけど、その予想は大外れだった。その攻撃を仕掛けてきたのは、私の幼馴染……
獅子王木 杯斗だった……。

「杯斗！いきなり何すんのよ！」

「五月蠅いな……。それより凜、なんでお前はアヴェンジャーが裏切っていないって思うんだ？」

「じゃあアヴェンジャーが裏切った証拠を出してみなさい！それが

私の納得出来るものだったら、私はあんたに従うわ」

……いつもの杯斗なら、泣いて謝る筈……だけど杯斗からはいつもと全く違う雰囲気を感じられる……何かヤバイ気がするわ。
杯斗がこちらを振り向くと、その顔はいつもとは違う冷徹さ、そしてもの凄い殺気が感じられる……。どうやっても間違いを認めないみたいね。だったら……。

「アーチャー！杯斗をぶっ飛ばしなさい！」
「了解した！」

勿論、杯斗も黙ってはいない。セイバーを呼び出し、アーチャーと戦わせた。……アーチャーがセイバーに勝つ事は、不可能に近いわ。なら、先に衛宮君の家に行って、アヴェンジャーを呼び出して、貰う……。

その後、セイバーを二人で、倒せば、OKね。……よし、まず脱出ルートだけど……。

「ちつ……セイバーだけじゃきついか……仕方ない。ライダー！来い！」

「えっ……！？ライダー……？」

杯斗がライダーと呼ぶと、目隠しをしたグラマーな長身の女性が現れた。……成る程、アレがライダーね。見た目からじゃ、なんの英霊かは分からないわね。

……杯斗は私達以外と同盟を組んでたの？でも一体いつ？基本は私達といたから、同盟は組める筈が無い。……今日、同盟を組んだの？でも今日は殆どの時間は学校に居た……。てことは、学校にいる人間がライダーのマスターの可能性が高いわね。

「凜、貴方にはマスターの為にも死んでもらいます！」
「アーチャー！一旦退却よ！」

こうなったら、衛宮君の家まで、逃げ切るしかないわね……。それにしても……。杯斗、なんであんたは私を殺そうとするのよ……。大好きだったのに……。なんで……。

アヴェンジャー SIDE

成る程な……。オリ主は間桐慎二……。もといライダーと手を組んだか……。ホントに見境が無いな……。まあ俺の知るオリ主つてのは、元も含めて、全員がそうだったけ？

まあ一番まともなのは、結人だったな。ああ、生前が懐かしい。

「兎に角、俺の家に帰るわけにはいかないな……。遠坂の家も駄目だろうし……。」

……。一番重要なのは、拠点の確保か……。さて、どうすつかね……。

拠点確保、暗殺失敗

さて、拠点の当ては無い。一瞬、言峰教会か柳洞寺に匿ってもらおうかと、考えたけど、明らかに駄目過ぎるプランだった。なんで俺はこんなプランを考えたんだろうな……。

悩んでも仕方ないな。改めて、拠点候補を絞っていくが……はつきりと言って思いもつかない。間桐桜の家も危険過ぎる。それにオリ主の事だ。間桐桜もハーレム要員だろう。

「……ねえ。衛宮君、アレなに？」

「さ……さあ……」

ん？どうしたんだ？マスターと遠坂凜は指を指して、何かを見ているが……。オイ。なんであいつがいんだよ。なんで、あの大馬鹿が……。

「まさっちゃん！改め、あヴエっちゃん！僕が着た「死ねえええええええ！クソ猫があああ！！」YA ME RO！」

機関銃を撃ち、裕猫を穴だらけにする。それに驚いたのか、マスターと遠坂凜は裕猫に駆け寄り……。ああ……間違いなく、生きるな。あの馬鹿。

「おい！大丈夫か！？生きてるのか！？」

「なあああに！勝手にあああつてに殺してええええんだああああ！！」

「ぎゃああああああああああああああ！！」

ほらな。あの馬鹿に付き合ってたら、ツッコミきれねえっつうの。

そして裕猫はマスターに抱き着き、泣いてるような、泣いてないような、意味不明な顔でマスターに言い寄っていた。

「シロー！あヴエっちゃんが虐めるー！」

「は、離れる！アヴェンジャー、なんなんだよ！コイツ！」

「安心しろー。ただの馬鹿……その手があつた！」

ああ！なんで、この馬鹿の事を忘れてたんだろう！この馬鹿、体の中に異様に広い空間を持つてんだつたな。それなら、誰にも見つからず、作戦や生活が出来るな。

「裕猫、口を大きく開けな」

「えっ？」

無理矢理、口を開ける。マスターと遠坂凜は口を大きく開け、啞然としているが、はつきりと言って一々説明するのは、めんどくせえな。

取り敢えず、マスターと遠坂凜を裕猫の中に放り込み、俺も一緒に入る。マスターと遠坂凜は非常に驚いているが、気にしない。

そして俺が周りを確認するいつものカオス空間が広がっていた。大昔の草花から、現代の草花までが、生い茂り、羊、山羊、犬、日本狼、ティラノザウルス、その他諸々の絶滅動物が揃ってる。……相変わらず、カオスってんな。

「アヴェンジャー、マジであの猫なんなんだ？」

「僕」あヴえっちゃん！あヴあちゃん「僕だろっが！シロー！」

ああ……また出てきた……アレエ？ココってこいつの体んなかだよな。なんでコイツが体の中にいるんだ？……まあ俺が気にしただけ……と言っか、気にした時点で負けだ。

とにかく裕猫の体の中を拠点として、聖杯戦争を進めるしかないな。因みに裕猫は一ヶ月以上、出しっぱなしでも大丈夫だ。理由？理由は簡単。我が友の隣に、は裕猫の魔力を喰らって、発動させているから、基本は常時発動。この馬鹿は魔力とかは、基本無限に近い魔力を持つてるからな。

さてと、そろそろ俺も暗躍しますか。まあ一番の目的はオリ主殺しかね。だけど問題はこちらの手札が少な過ぎることだな。こっちの切り札は、裕猫達と遠坂凜及びアーチャー、そして最後にマスターを殺す事になるかも知れんが、我が友の隣に、による俺が知るかぎり、最強の女、アリシア・テストロッサの召喚。本当の事を言うと、我が友の隣には、マスターの魔術回路を全て、焼き尽くし、マスターを殺す危険性がある。だから、余り使いたくない。

「マスター、ちょっと行ってくる。裕猫、マスター達を出すなよ」
「は？アヴェンジャー？どう言う意味」

クロックアップ。マスターの許可無しで使えるのが、コイツの一番の利点だな。

マスターには、悪いが、マスターは正義の味方になれないかも知れんな。マスターに従うけど、それはマスターと俺の命が危なくない時に限ってだ。命の危険があるようなら、俺はマスターには、従えないんでな。

「セイバー、アヴェンジャーの気配は？」
「いえ、感知できません。アヴェンジャーは元々、覇気も魔力も無いせいか、全く気配が関知できません……」

おっと、ラッキーな事に、まだオリ主は俺の存在に気付いていないみたいだな。最も気付いていないふりをしているだけかもしれないがな。

気付いていないふりをしている理由？それは恐らく、セイバーに暗殺をされる自分を見せ、よりセイバーを心配させる為と、暗殺をされるが、生き残る強い自分を見せるためだろう。さて、そろそろ暗殺を始めようかね。

二式小銃を構え、標準をオリ主の頭部に合わせる。オリ主は動かない。セイバーは俺とマスターを見つける為か、周囲100mを駆け回っている。

息が詰まる。手の汗で引き金を間違えて、引いてしまいそうだが、そんなミスは犯さない。犯してはいけない。そしてセイバーが出来る限り、オリ主から離れた瞬間、引き金を引いた。放たれる銃弾と銃声。それにセイバーもオリ主も気付いたが、もう遅い。銃弾はオリ主に当たる………と思ってしまった。オリ主は体を右に倒し、銃弾を回避する。やはり、オリ主は気付いていないふりをしていたか……。仕方ないな。逃げるか。

クロックアップを使い、オリ主から逃げる。これなら、オリ主も追って来られない。……くそ、あーミスった。落ち着いていれば、確実にオリ主を仕留められていた……。暗殺は一度失敗すると、二度と成功しない。だとすると、俺とアーチャーで勝つのは、難しい。オリ主はマスターを殺す気マンマンだし、遠坂凜に限っては、またオリ主に魅了されるだろうし……。

だとすると、一番良いのは、一般人の協力者だな。だが、金で雇うのは、駄目だ。金で裏切る可能性が高い。……あー、誰かマスターの為なら、人を殺す事が出来る奴はいないかねえ。

そして裕猫の所に戻ると、そこには、アーチャーが待っていた。相違や、コイツ、単独行動のスキルを持っていたんだっけ。

「暗殺はどうだった？」

「気付いてたのか……」

「当たり前だ。アヴェンジャー、君の性格上、目的の邪魔をする奴は殺すと思って、かまを掛けさせてもらった」

……そうか。今度からは、気付かれないようにしないな。元正義の味方と二人でいるか……こんな時は、嫌な思い出が蘇るな。

「なあアーチャー」

「なんだ？アヴェンジャー」

アーチャーは答える。俺はあの時、俺に聞かれた質問を、アーチャーに質問する形にして聞きたくなった。アーチャーはどんな答えを出すんだろうか。

「お前の正義はなんだ？」

悪と正義、正義と悪

「すまない、私自身も私の正義は分からない。なにせ私は、自分の正体も分からないからな」

「そうか……」

そりゃそうだな。一応、アーチャーは記憶喪失って事になってるからな。さてと、裕猫の中に戻るとしますか。

「あヴエっちゃん、あヴエっちゃん。シローと凜は、杯斗に会いに外へ出ていきましたよ」

「……貴様らは、何してんじゃ！」

「すまない……私も止めたのだが……」

ちっ、仕方ない。今からなら、マスターを助けられるか？ だけどセイバーとライダーを同時に相手には、出来ない……と言うか、俺じゃ、どっちにしる相手できないな。

こうなったら、アーチャーに手を借りるしかないか……！ いや、待てよ……。あれをあーして、ああやれば、もしかしたらマスターと遠坂凜、そしてセイバーを……いや、物語を元の軸に戻せるかもしれない……。

「アーチャー、先に行つてくれ」

「分かった。速く戻ってこい」

さてと、リセット作戦つか？ まあ作戦の問題点はへたすりゃ、俺が死ぬ。まあ良かったら、マスターのサーヴァントが、一機、増える事になるだけだな。

さて、リセット作戦の要はキャスターの宝具『ルールブレイカ破戒すべき全ての

符』だ。その為には、キヤスターと一時的でも同盟を組む必要がある。ま、まどろっこしい事は説明しないで、キヤスターのいる柳洞寺に行くとしますか。それと持っていく物があつたな。何かって？それは縄だ。俺は縄で葛木宗一郎を縛るつもりでいる。実際、どうなるかは分からんがな。

クロックアップしてきたから、時間的には問題は無いな。にしても……ココが柳洞寺ね……。アサシンは……あーやっぱりいるか。ま、クロックアップすれば、問題ないな。

裕猫SIDE

僕は今、アちゃっち事、アーチャーと一緒に夜の冬木市を走り回っている。目的は簡単、シロー事、衛宮士郎とリンリン事、遠坂凜の搜索をしている。

リンリンは、やっぱりまだ獅子王木杯斗の事を信頼しているみたい。獅子王木杯斗の能力はまだ不明。僕も元々、天使やってたから神様の力の流れで、多少は能力を感じられて、予測できるけど、流石に別の世界の創造神の力の流れを感じるのは、厳しいか……。

……にしても、暇だなー。そうだ。アちゃっちに問題を出そう。

「アちゃっち、シローはなんで、あヴえっちゃんを召喚できたと思う？」

「触媒を使わず、サーヴァントを召喚した場合、召喚者に近いサーヴァントが召喚される。つまりは、衛宮士郎自身に一番近いサーヴァントが彼だったのだろう」

「おお、パーフェクトな答え。じゃあ何処が一番、シローとアヴえっちゃんが近いと思う？」

「……………」

やっぱり、分かんないよねー。シローとあヴえっちゃんの似てい

る所。僕だつて、あヴえっちゃんの事を知らない、全然気付かなかったもん。

「シローとあヴエっちゃんね。どっちも夢が近いんだよ」

「正義の味方と悪役がか？」

「そ、アちゃっちには、特別に教えてあげるよ。実は！あヴエっちゃんは異世界の英霊なのだ！」

「悪い。知っていた」

…………… やつべ。滑った。まあ、話が滑っても、つつき抜けるのが、僕の流儀さ！

「知ってたなら、話は早いね。実はあヴエっちゃんが子供の頃、正義の味方って名乗る連中に、目の前で親を殺されたんだ。あヴエっちゃんの親はジャーナリストでね、警察の知っちゃいけない事を知ってしまったんだ。勿論、あヴエっちゃんは警察にその事を言ったよ。だけど、正義の味方は警察の上層部の連中の差し金。事件は揉み消され、証拠の隠滅の為にあヴエっちゃんとその周囲の人間を、正義の味方達は殺し始めたんだ。だけどね、それを助けてくれる人がいた。その人は自分の事を悪役だと言った。だから、あヴエっちゃんはその人に憧れ、悪役を目指すようになった。そして衛宮士郎は……分かってるだろ？アーチャー」

「自分を助けて、育ててくれた親、衛宮切嗣の正義の味方に憧れる。…………… 確かに似ているな」

「そ、助けてくれた人に憧れ、その人と同じ者になろうとする一途な気持ち、シローにあヴエっちゃんを呼べた理由さ」

関係ないけど、この情報は神様経由で知ったんだYO！

アヴエンジャー SIDE

柳洞寺に潜入は成功……。あとは葛木を人質に取れば、キャスターと楽に同盟を組めるな。だけど問題は、葛木宗一郎が俺ごときに人質になるかどうかなんだよな。

実際問題、俺、マジで弱いし。ま、どうにでもなるか。と言うか、やらねばならん。やらなかったら、俺死ぬし。ま、その辺はどうでも、いいか。

……お、アイツが葛木宗一郎か。それじゃ行動に移りますか。

「む、何者だ」

「初めまして、葛木宗一郎。早速だけど、人質になってもらっ

そう言うと、葛木宗一郎は、大きく一步を踏み出し、俺を蹴る。

勿論、俺もクロックアップして、蹴りを避ける。だけどクロックアップを解いた瞬間、謎の魔弾が俺を襲った。クロックアップするが、避けきれ、二三発、魔弾が腕に当たってしまった。

状況からして、魔弾の主は、キャスター。なら、対処法は簡単だ。今はクロックアップ状態、なら簡単だな。葛木宗一郎の腕を縄で、動けなくする。そしてホッチキス M1e1914 重機関銃を葛木宗一郎の頭に突きつけた。

「宗一郎様！今すぐ「おっと、動くんじゃねえぞ。コイツは人質だ。お前が動いた瞬間、コイツの頭を撃つ。それが嫌なら、俺の命令に従いな」誰があんななんかの命令なんかに……！」

「じゃ、コイツは死んでもいいんだな」

ホッチキス M1e1914 重機関銃の引き金を引こうとすると、キャスターは手をこちらに構えた。……狙いは俺の頭か。俺が引き金を引いた瞬間に、魔術を使って、俺を殺すつもりでいるのか？

愛しの人が死ぬ代わりに、その人の敵を討つてか？ははは、笑

えねえな。俺自身も死にたくはない。そもそも、俺が死んだら、獅子王木杯斗の手でマスターも死ぬ。可能性が高い。

……… 相違や、俺の目的は悪役になる事だよな。いつの間にか、目的がマスターを生かす事に変わってんな……。サーヴァントの性
つてやつか？

「俺の言う事に従ったら、コイツは開放する。どうだ？この条件を受けないか？」

「……分かった。早く言いなさい」

「ありがとう、それじゃあ、
『破戒すべき全ての符』を貸してくれ」

そう言うつと、キャスターは『ルールブレイカー破戒すべき全ての符』を取り出し、こっちに投げた。そして俺も葛木宗一郎を解放し、クロックアップで逃げ出した。

最低な男、最低な正義

さてと、『破戒すべき全ての符』は手に入れた。一応、コレは存在その物が宝具だから、キヤスター以外の奴でも、使えるから、意外と便利なんだよな。……パクるか？ いや、止めとこう。後で何されるか分かったもんじゃない。

まずは、作戦の確認をしよう。色々問題はあがあるが、一番の問題は、俺がオリ主の左腕にコレを突き立てられるか、どうかだ。クロックアップして、オリ主の腕に『破戒すべき全ての符』を突き立て、令呪を奪い、マスターの令呪を……つまり俺を遣えている証である令呪をオリ主に送りつけ、俺がオリ主の頭に銃弾を撃つ。そうすれば、物語の異質の存在である俺とオリ主を消滅させる事が出来る。

この作戦はマスターに恨まれたって、実行しなきゃならん。理由？ それは簡単だ。元々、俺達は、この世界に存在していない存在だ。所謂バグだな。バグは存在してはいけない。俺達がいたせいで、俺のいた世界は全て壊れた。それを二度と世界を壊す事はないようにするには、俺達を取り除かれるしかないんだ。

凜 SIDE

杯斗は裏切った……。それは認めてる。でも……私はなんで杯斗が裏切ったのか、知りたい。たぶんコレは未練だ。小さな頃から一緒にいた大好きな幼馴染を信じたいという未練。

私って、本当に馬鹿……。コレは戦争なのよ。生きるか死ぬかの戦争。そこに幼馴染も、好きな人も無いじゃない。でも……私は……杯斗に会いたい。大好きな人に会いたい。

「遠坂、遠坂は杯斗の事が好きなのか？」

「はあ！？ ふざけんじゃにやいわよ！ 誰があんな奴の事なんか……」

……しまった。噛んでしまった。間違いなく、私が杯斗の事が好きだってばれたわね。ま、仕方ないかな。衛宮君だって、馬鹿じゃないだろうし。

「……そうよ。私は杯斗の事が大好き。たぶん小さい頃から、一緒にいたから……。本当に馬鹿だよ、私。殺されかけたのに、まだそいつの事を好きでいるなんて……」

「いや、そんな事無いと思う。遠坂が杯斗の事を好きなのは、当たり前だし。杯斗はカッコいいし、頭がいいし、魔術師としても優秀だし……」

「ふふ……ありがと、褒め言葉として、受け取っとくわ」

もうそろそろ、杯斗の本拠地、獅子王木の屋敷に着くわね。あの屋敷になら、間違いなく、杯斗は入るわ。杯斗に真相を聞けば、私は杯斗に寝返るかもしれないけど、それはそれで、仕方ないわね。だって、私は杯斗の事を愛しているもの。……！あれは……杯斗とセイバー……。

「……衛宮、それに凜……」

「聞かせて、杯……！」

杯斗はいきなり走って、私に抱きついてきた。この感覚……本当に久しぶり。最後に抱きつかれたのは、父さんが死んで、私が泣いてる時、抱きついてくれたのが、最後だっただけ。

杯斗の香り、暖かさ、感触、全てが全て、私を満たしてくれる。私はこの為に、生きていたい。大好きな杯斗の為に、生きて生きたい。

「愛している。世界中の誰よりも、愛してる」

「私も、杯斗の事が……大す……！駄目！駄目よ！」

あ、危な……思わず、堕ちる所だった。まずは肝心な事を聞かなきゃ。なんで私を裏切ったか、なんでアヴェンジャーの事を裏切ったと言ったか。これを聞かなきゃいけないわ。

「聞くわよ、杯斗。なんで私を裏切ったの？」

「そんな些細な事、どうでもいいじゃないか。俺は凜を愛しているんだ」

「あつ……」

もう……なんでこんな時に言うのよ。……そうよね。そんな些細な……駄目よ！目を覚ましなさい！遠坂凜！杯斗の言葉に惑わされるな！

杯斗は私を裏切った……。その杯斗の言葉は……。杯斗の言葉は……。

「いいか、凜。この聖杯戦争は狂っているんだ。この狂った聖杯戦争に参加しては、いけなかったんだ。だから、もう止めよう。死んだ奴らは、無駄に命を張っただけだ。無駄死にした一般人も逃げればよかったのに、逃げなかった。聖杯戦争に参加した奴は、本当に馬鹿だ。凜はそんな馬鹿にならないでくれ。これからは俺と一緒にいてくれ。コレから、俺の正義と一緒に貫いてくれ」

………今なんて言った？無駄に命を張った？本当に馬鹿？死者を馬鹿にするのは、杯斗でもしてはいけない。それに杯斗は、奴らって言ったわ。

それは父さんが、聖杯戦争に出て、無駄に死んだって言ってる事と同じよ。それに一般人が無駄死にした、逃げればよかったのに、逃げなかった。それは違うわ。彼らは逃げられなかったのよ。それ

を無駄死になんて言うのは、許さないわ。

「ゴメン、杯斗。やっぱり私はあんたの事、大嫌いだわ」

「…………私事です。マスター。貴方は、力無い者を馬鹿にした。それに聖杯戦争に参加した彼らは、それぞれの思いがあった筈です。それを馬鹿にする事は、私は許さない！」

「…………は？」

本当に、なんで私は、こんな奴の事が好きになっただろう。でも分かる事が一つだけあるわ。杯斗…………コイツは最低な正義を振りかざす男だつて事が。

「セイバーさん、遠坂、俺も一緒に戦う。コイツは許しちゃいけない！」

「凜！助けに…………その必要は無さそうだな。私も一緒に戦う」

「くそつ…………！セイバー！俺の命令に永遠に従え！そして衛宮士郎、遠坂凜、アーチャーを殺せえ！」

アヴェンジャー SIDE

今着いたが、面白い事になってんな。遠坂凜とセイバー、そしてマスターのオリ主への反逆ってか？アーチャーも着たか…………。コレはオリ主死んだかな？

オリ主はセイバーに令呪を使い、俺の命令に永遠に従え、と言うと、その次に衛宮士郎、遠坂凜、アーチャーを殺せと命じた。

やばいんじゃない？コレ。ま、いつか。その前に、俺も俺でやる事があるんだよな。『ル破戒すべき全ての符』を取り出し、クロックアップする。全員の動きが、止まる。そしてオリ主の右腕に『ル破戒すルブレイカー』

べき全ての符』を突き刺し、令呪を奪い、今度はマスターの右腕に

ルールブレイカー
『破戒すべき全ての符』を突き刺した。

そしてクロックアップを解除する。すると、オリ主の腕から、令呪は光を失い、マスターの右腕にセイバーの令呪が刻まれた。

「アヴェンジャー！着てくれたのか！それに……コレは……」

「マスター、俺の令呪をこっちに向ける。アイツに令呪を移す」「断る」

……改行を入れる暇なく、言われてしまった。……ま、それがマスターの命令なら、従うか。それに今分かった。今一瞬だけ、マスターに断ると言われ、俺は安心した。

それは俺がマスターと離れたくない、まだ死にたくない、とか心の何処かですべていたせいだろう。だから、安心した。さてと、そろそろ戦いますか。

最低な男、最低な正義（後書き）

緊急募集です。

貴方の考えるサーヴァントを募集します。

条件としては、サーヴァントの性別が女性である事だけです。歴史上の人物でも、神話上の人物でもいいです。女体化でもいいです。

ステータスが思いつかないという方は、サーヴァントの真名と宝具だけをお書きください。

0と1、0と1億

さてと、オリ主への反乱と行きますか。いつも通りの俺の相棒、ホツチキス M1e1914重機関銃を両手に持ち、オリ主に乱射する。それを紙一重でオリ主は避けるが、アーチャーの遠距離からの射撃と凜の宝石魔法による攻撃に、当たってしまう。オリ主が立ち上がると、セイバーは透明の剣、風王結界を構え、オリ主と対峙する。

オリ主も日本刀を構え、セイバーと対峙する。その刹那、キンと金属音が響いた。セイバー対オリ主は、オリ主の方が若干、セイバーよりも有利に見えた。と言うか、このオリ主って何者だ？アヴェンジャーとか（俺も含む）なら、マスターでも勝てるかもしれないが、相手は一応、最強のサーヴァントであるセイバーだ。それを押しているなんて、不思議で仕方ない。と言うか、俺の読んでいたチート最強オリ主でもサーヴァントに勝つのは、見た事がないから、不思議で仕方が無い。

「くっ！杯斗ッ！私は貴方と刺し違えても、貴方を倒してみせる！」
「セイバー……お前が俺に勝つのは不可能だ。俺を0に例えると、お前は1だ。はつきり言つて、俺は非凡だ。そんな俺だつて努力すれば、お前にだつて勝てる。お前は努力なんてしてな「はいはい、その台詞はテメエが言うのは禁止だぜ。と言うか、お前がその台詞言うのが、間違つてんじゃないかねえのか？」……！アヴェンジャー！またテメエか！」

あまりにもオリ主がウザイので話しかけてしまった。大体コイツと他の人間を比べたら、コイツが非凡だったら、天才は世界を作り変える事が出来るんじゃないか？ああ、恐ろしい、恐ろしい。

さてと、そろそろオリ主の言つた事に、対しての矛盾を突くか。

出来れば、矛盾を突くのは俺じゃなくて、遠坂凜やセイバーが良かったんだが……。まあ遠坂凜やセイバーに事情を説明するのは、メリットよりもデメリットの方が、大きい。だから、仕方ないので俺が矛盾を突く。オリ主は、どいつもこいつも、精神的に弱いから俺のような邪魔キャラに矛盾を突かれても、そうたいして痛くは無いだろうが、自分を囲むヒロイン達に、それを言われる事により、それは威力を増し、オリ主の精神は徹底的に破壊される。俺の知ってる奴も、自分を慕い、自分と一緒にいる予定だった奴に、偽善者と呼ばれ、可笑しくなった。まともに会話しなくなり、自分を慕ってくれた奴を自分を庇わせてしまい、一時的戦えなくしてしまった。このようにオリ主はいとも簡単に壊れる。だから、俺よりもヒロインに言わせる方がいいのだ。だが、稀に、本当に稀にそれを取り越え、オリ主では無くなる奴がいる。生前でも三人見かけただけ。コイツがどう転ぶかね。

「ああ、俺だとも。それよりも、お前に言いたい事が大量にあるが、まずはお前が非凡であるわけない。何せ遠坂凜が言うには、お前の魔術回路は異常だそうだな」

「は？」

「一般的な魔術師が持つ魔術回路の本数は20本。それに対して、お前の持つ魔術回路は1京の魔術回路を持つらしいな。普通に考えて人間の持てる数じゃない。それに耐えられるお前、コレを才能が無い、非凡だと言えるのか？それに非凡は特に一部が特化している事を指す。つまりお前は自分を有能だと言った。どう思う？そして、次は劣るって言うか？違うね。お前は劣ると、嘘をついているだけだ。自分が劣ると嘘をついているだけだ。俺としては、お前が無能の方がいいんだけどな。だけど実際は、無能ではなく、有能。劣るではなく、優る。敗北ではなく、勝利。不人気ではなく、人気。無関心ではなく、愛情。現状維持ではなく、進化。全てが普通でも劣るでもなく実際は全てが優秀な人間。お前は周りの人間と同じと

言う、自分自身の自尊心、いやお前は平等な満足感を味わいたいだけ。さて、改めて聞こう。お前は普通なのか？」

「……………そうか。悪かったな」

ちつ。やっぱり、ダメージは無いか。やはり、遠坂凜に……………ん？
アイツ……………足が震えてる？自分が異常だと気づいて、脅えているのか？オリ主は自分自身を普通だと、思ってる奴が多いからな。普通を破壊されれば、脅えるしかないかね。

「そうだ。お前に聴きたい事があるんだ。お前は自分を0に例え、セイバーを1に例えていたな。それはどういう意味だ？才能があるのは、お前だ。それに比べたら、セイバーは0、お前は一億と言っているだろう。1と0、0と一億。なあどっちが正しいんだ？俺が間違っているのか？なら正してくれないか？お前自身の言葉で」

「……………た、いちよ、うがわ、わ、わる、い。か、える」

あら？逃げちゃった？まあ仕方ないかな。人間は恐怖から本能的に逃げようとする。恐らく、恐怖を感じたオリ主の体は逃げようとしたのだろう。それで体調を崩したのだろう。

「……………アヴェンジャー、改めて貴方だけは敵に回しては、いけないと、認めていないと感じました」

「それは褒め言葉として受け取っておくよ」

恐らく、マスターの家……………もとい衛宮邸に帰っても大丈夫だろう。それを言う為にマスターの下に向かったが、マスター達も家に帰ると方針を決めていたみたいだな。

そして、衛宮邸に帰ると、思わぬ人物と遭遇してしまった。

「士郎！家に帰らないなんて、駄目だぞ！と言うか後ろの女の子二

人はなんだ！まさか乱。パー「それ以上は言わさないぞ！」

「藤村先生……」

藤村大河。F a t e / s t a y n i g h t の裕猫みたいな存在。
番外編みたいな存在のタイガーころしあむでは、全ての元凶。

駄目だ。嫌な予感しか無い。

「あヴェっちゃんも出な！」

「そうなのです！マスターも出るべきなのです！」

「ちよつと待て。なんでライカが入る。お前は一応、兵器だから出せるけど、出した覚えはないぞ」

「細かい事は気にしない！ヒヤッハー！！！」

こうして、愉快不愉快に俺達の聖杯戦争の二日目が終わるのであった。

壊れた物語、再生する物語

許さない……許してはいけない。俺のハーレムをぶち壊して、俺の物語をぶち壊して……アヴェンジャー……そして衛宮士郎。なによりも許せないのは、遠坂凜とセイバーだ。凜は小さな頃から、一緒にいたのに、なんで俺を裏切ったんだよ……。そしてセイバー、あんなに愛し合ったのに、なんで裏切ったんだよ……。こうなったら、この聖杯戦争を消してやる。そして俺が聖杯を作り上げる。そして俺だけの物語、俺だけの真実を作り上げてやる。

アヴェンジャー SIDE

「ライカ！ 吞め！ 吞むのだああああ……！」

「ははあー！ 吞ませてもらうでございます！」

……半端なくノリノリだな。チームバカ。俺達は衛宮邸に戻った。聖杯戦争4日目も、特に説明する所無く、終わり、そして夜。作戦会議をする予定だったんだが、あの馬鹿猫が、「ついでに宴会やろっぜ！ 宴会！」、なんて言うから、いつの間にか、宴会になってしまった。

まあ、今度からの行動方針は決まっただけだな。俺はオリ主と、獅子王木杯の探索兼暗殺。そして出来ればけど、あの聖杯をなんとかしたい。そしたら、桜ルートに入ってなくても、聖杯に願えば、セイバーは消えないし、俺も消え！ この感覚……と言うか衛宮邸の近くで血の臭いだと？ マスターも、凜も気付いたのか、直ぐに外に出た。そしてそこにいたのは。

「ココがお前らのアジトか^{オレ}」

「ふっ、古臭いな。王たる我^{オレ}には、似合わないな」

「そんなことを言うではない金の字。すまぬ、このような無粋な輩共で」

ランサー、アサシン、そしてギルガメッシュだった。ランサーとアサシンとは接点がある（アサシンは間接的だけど）が、さすがにギルガメッシュとは接点は無い……。でも何故ココに……。

「よ、久しぶりじゃねえか。あの時のサーヴァント」

「そっちこそ久しぶりだな。一日目のサーヴァント。で、何のよう^だ」

そう。俺達の目の前に現れたことは、あまり問題はない。問題は、こいつらがココに来た理由だ。俺達と戦いに來たのなら、逃げればいいだけの話だ。そして幾つかの謎がある。

その謎とは、一番気になるのは、何故、アサシンがココにいるのか。確か、コイツは山門に縛り付けられていて、山門から動けないはずだ。尤も、キャスターが死んだ時は山門から開放されて、自由に動けるようになったんだがな。

「それよりも、ココに來た目的を教えてください。目的次第では、帰る事を願う」

「ふ、雑種^{オレ}が。我に敵うと思つのか？」

あー。なんだよ、この傲慢王様。俺、こつ言う奴、苦手なんだよね。睨み合う俺とギルガメッシュ。その中心にランサーが入り込み、俺とギルガメッシュを離す。

「待て、待て、待て。少しは落ち着こうぜ。アンタも、勝てない戦

いはしたくないだろ」

「……分かった。勝てない戦いなんて、無意味以外の何物でもないからな。今回はお前の意見に賛成する」

勝てない戦いはしたくない。無茶な戦いはしても、それが勝てる可能性のある戦いの場合だ。俺とギルガメッシュが戦ったら、間違いないく、100%の確立で負ける。

そんな戦いをするくらいなら、オリ主と同盟を組んだ方がマシだ。ギルガメッシュは、仕方が無いと言いたげに、俺と一步分の距離を置く。

「じゃ、本題に入るぜ」

「ええ、話してちょうだい」

俺に会話させるのが、危険だと判断したのか、凜がランサーに話しかける。実際、その判断は正しいと思う。ランサーは少し、間を空けて。

「あんた等のどちらかと、俺かアサシンと再契約して欲しい」

「「は？」」

「……は？マスターも、凜も、セイバーも、ましてや俺も、ぽかんとしてしまった。いきなりなんだ？ランサーは言峰綺礼と、アサシンはキャスターと契約しているはずだろ？なんで、マスターと凜に契約の話を持ちかけてくるんだ？」

「貴方にも、マスターがいるでしょ。それにマスターが死んだつてわけでもないんだから、再契約なんて出来るはずがないんじゃない」

凜が最も、俺が聞きたかった質問を聞いてくれた。そして流れるように、ランサーは凜の質問に答える。

「それが死んだんだよ。俺のマスターも、アサシンのマスターもな」

……言峰綺礼が死んだ？それにキヤスターも死んだって？……………可らしい、そんな物語は、絶対に無かった筈だ。もしかしてオリ主が動かしたのか？だったら、なんでキヤスターを殺したんだ？オリ主は、まず間違いなく、キヤスター………と言つか、顔が綺麗な女は殺さないはずだ。

リリカルなのはのプレシア・テストロッサが良い例だ。たった一人の娘の為に世界を敵に回してでも、理想を叶えようとするところある意味、俺の理想の悪。と、話の主旨がずれたな。はっきりと言って、プレシアは、助ける余地が無い悪だ。だが、オリ主は何らかの理由を着けて、プレシアとアリシアを助けようとする。そして自分のハーレムに加える。こう言う所から、オリ主は顔が綺麗な女は間違いなく助けようとする。だから、何でキヤスターを殺したのか分からない。

「今日、私の主君はセイバーと名乗る大柄の男に殺され、ランサーのマスターはアーチャーと名乗る細身の男に殺されたそうだ」
「ちょっと待て、少なくとも、セイバーは俺の知っているセイバーは男じゃないし、アーチャーはずっと、遠坂と一緒にいたぞ」

マスターが明らかに出てきた矛盾を付く。どうせ、俺が矛盾を言う予定だったので、俺に負荷掛からなくて良かった。

「くそっ！今、思い出しても、腹が立つ！我が慢心王だど！？ふざけるな！慢心せずして何が王か！」

「落ち着け、金の字。たった一度、負けただけだ。そんなに悔しが

るな」

……ギルガメツシュが負けた？ありえない……と言つか、信じたくない。一応、ギルガメツシュは最強のサーヴァントだからな。普通に考えて、慢心して負けたのだろう。でも……ギルガメツシュを倒すサーヴァント（仮）か。サーヴァントは、俺みたいな番外クラスを除くと、全て償還されているはずだ。まさか……な。そんなこと、幾らオリ主でも、リスクが高すぎて、やるはずは無い。

「そう言えば、アーチャーって名乗ったサーヴァントは、こんなこと言ってたな」

「……なにを言ってたの？」

「確か……我が主は此処に宣言する。第6次聖杯戦争の始まりを……とかだった気がする」

……はははは、マジかよ。と言つか、ありえない。マジでやりやがった。アイツ……自分で聖杯を作りやがった。

サーヴァントステータス

クラス：アヴェンジャー

真名：恒川政利

性別：男

身長・体重：171cm 61kg

属性：悪・秩序

マスター：衛宮士郎

特技：機械弄り、嘘、射撃

好き：甘い物、信じられる人間、家族、妻

苦手：辛い物、熱い汁物、本音、信じられない人間

天敵：チート能力持ちの転生者、セイバー、マヨネーズ、ポン酢

クラススキル

単独行動：C

マスターからの魔力が絶たれても現界していられる能力

ランクCなら、1日程度存在し行動可能

保有スキル

武器召喚：C

生前、1万以上の武器を扱った者に与えられるスキル

生前に彼が使った武器を召喚できる

無論のこと、銃弾は有限である

神性：D

神霊適性の高さ。高ければ高いほど、神との交わりが深いことをしめしている

彼が転生者である為に、与えられたスキル

カリスマ：C

戦闘における統率・士気を司る天性の能力。

一つのチームを率いるには、充分すぎるカリスマ

ステータス

筋力D - 魔力E - 耐久E - 幸運E + 敏捷E - 宝具A +

宝具

クロックアップ

何者より速き者

ランク：A++ 種別：対界宝具 レンジ：∞ 最大補足1人

アヴェンジャーが神から与えられた能力

発動中はアヴェンジャーの時間は、その世界の1億分の1となる
時が止まってるに等しく、アヴェンジャー以外は動けない

またアヴェンジャーが触れている物（生き物以外）なら、時間は
アヴェンジャーと同じになる

我が友の隣に

ランク：B+ 種別：対軍宝具 レンジ：1～50 最大補足10
0人

アヴェンジャーが、常に誰かと共に戦っていた為、宝具となった
生前、アヴェンジャーと共に戦った仲間を召喚する

強力な力を持つ者ほど、消費する魔力が多く、弱ければ、弱いほど、
消費する魔力は少ない

また大量の魔力を持つ者を呼ぶ場合、呼ぶ者の魔力を使い、召喚す
る事ができる

ハイロンのふくめん

正体を隠す為の覆面

ランクC - 種別：対人宝具 レンジ：1人 最大補足 -

アヴェンジャーが生前、好んで使っていた悪魔をイメージする覆面
神秘の欠片も何も無いが、彼の身近な人間以外には、何故か正体が

ばれない

解説

異世界の英霊

元々は、彼の世界で行われる聖杯戦争に参加するサーヴァントだったが、何故か異世界の聖杯戦争に召喚された

銃や宝具を使わないと、信じられないほど弱く、自身のマスターにも負ける

また勝てない戦いは行わない主義で、自身の大切な人の命が危機でない限り、負ける戦いはしない

不意打ち、暗殺、罠、卑怯、嘘、なんでもやるが、仲間と認めた人間には、嘘だけは吐かない

また敵や信じられない人間の事は、フルネームで呼び、信じられる人間の事は、名前で呼ぶ

転生者であるが、ハーレムや原作キャラなどには、興味は無く、ただ悪役を目指す事に興味がある

アヴェンジャーの弟も転生者であるが、兄弟仲は良好

恋をすると、その人しか愛さなくなり、他はガン無視である

だが、その人が拒めば、直ぐに諦めるという潔い性格

関係ないが、マヨネーズとポン酢が苦手と言うレベルではなく、もはや天敵である

マヨネーズとポン酢を近づけただけで、激怒する

弟、狂戦士

聖杯戦争五日目……いや、第六次聖杯戦争初日、マスター達は学校に行った。こんな時でも学校には、行かないといけないからな。そして凜のサーヴァントとして、ランサーとアサシンが加わった。ギルガメッシュは既に受肉しているから、マスターとの契約はしつようなないそうだ。因みに、ランサーが再契約する理由は第六次アーチャーと再戦したいかららしい。アサシンも恐らく同じ理由だろう。

んで、俺は今現在、オリ主を暗殺する為の計画を練っている。マスターの護衛はセイバーに任せているから、安心して計画を練れるってやつだな。一番の方法としては、毒殺だ。尤も、成功するかは、分からんがな。

「アヴェンジャー、聞きたいことがあんだけど、いいか？」

？ランサーが俺に聞きたいこと？なんだ？可能性としては、セイバーとオリ主が聞いてきた俺が聖杯に願う事とかだろうか。……いや、相違や、この家には、あの馬鹿猫がいたな。たぶん、あいつの事だろう。

「お前、この時代に知り合いいるのか？」

「は？いるはず無いだろう。俺の知り合いが、この時代にいるなら、速攻、会いに行ってるわ。それに、なんでそんな無駄な事を聞くんだ？」

そう言うと、ランサーは来い、と言い玄関の方向に向かった。俺もそれに着いていくと、そこには、俺のよく見知った人間がいた。思考が停止する。体が動かなくなる。目を離せなくなる。気分が悪

くなる。吐き気がする。俺の目の前にいたのは、俺のよく知る人物。弟の妻であり、俺とは元々敵対していた女。そしてこの世界にいるはず無い人間であり、いるとしても、その姿ではなく、最も老いた姿であるはずだ。

「こんにちは……。アヴェンジャー」

高町なのは、彼女だった。その姿は彼女が最も活躍し、輝いていた18歳前後の姿。そして人間とは、思えないほど神々しかった。まるで神秘の塊であるサーヴァントのように……。いや、現実逃避は止めとこう。彼女は、まず間違いなく、オリ主が召喚したサーヴァントだ。彼女が死んだ姿は見えていないが、老いた姿であったことは、まず間違いない。それでは、何故に彼女が若返っているか、それはサーヴァントだからに間違いないだろう。理由は簡単、サーヴァントってのは、生前に最も輝いていた、いや、クラス的な例外があるが、最も力が強かった頃の姿で召喚される。俺のように最弱のサーヴァント「復讐者」^{アヴェンジャー}で召喚された場合は、俺が英霊として、最も弱かった頃で召喚された。それと同じように俺のクラスが「弓の騎士」^{アーチャー}だった場合、俺が「弓の騎士」^{アーチャー}として、最も力が強かった頃で召喚される。だから、高町なのははサーヴァントのクラスとして、最も力が強かった頃の姿で召喚されたのだろう。

「なんのようだ？」

「用件は一つだけなの。結人君を助けてほしいの」

「結人を？」

思わず声を上げてしまった。結人は、俺と同じ転生者であり、それと同時に非常に扱いにくい能力を持っている。転生当事は、この世界の技である「無限の剣製」や「王の財宝」を所有していたが、途中から、以前の能力をリセットし、高町なのはだけを守れる能力

を保有した。その為、俺的に非常に扱いにくい能力認定をさせてもらった。

……結人を助けてほしいって事は、この世界にサーヴァントとして、結人が召喚されたのか？だとすると、宝具は高町なのは守る能力の可能性が高いな。最も、クラスによっては、違いかも知らないが。

「まずは具体的に結人がどんな状況下に置かれているか教えてくれないか？」

「うん……結人君とわたしは、ついこの間、この世界にサーヴァントとして召喚されたの。わたしのクラスはキャスター、そして結人君のクラスは——狂戦士^{バーサーカー}。結人君はバーサーカーのクラスで召喚されたから、狂化はまだ一番低いEだったから、会話は出来たけど、わたし達のマスターは、それを認めなかった。結人君に更に強力な狂化の魔術を上書きしたの。そしたら、結人君はマスターくらいじゃないと止められないくらい暴走したの。それで夜になると、マスターは結人君を街に放して、暴れさせる……。わたしは……。こんな……結人君を見てられないの……。だから……。だからあ……」

……成る程。あの馬鹿、バーサーカーのクラスとして召喚されたのか。それで暴れていると。たぶんコイツらのマスターは、オリ主だ。現代の魔術師が最大の狂化の魔術をサーヴァントにかけて、それを止めるとしたら、オリ主くらいしか、思いつかない。夜に暴れさせる理由は知らんが、だとしたら、問いは簡単だ。兄貴の俺が止めなくちゃ、誰が止める。オリ主が止めて、また街を壊させて、この世界の結人の存在が、反英霊になっちゃたらんな。

でも、結人の力は膨大だ。膨大過ぎるほど、膨大だ。宝具を使わない結人は弱いかもしれないが、宝具を最大まで使った結人は、この世界の誰にも勝てない。いや、アルクエイド・ブリュンスタッドなら、勝てるか？……恐らく、五分五分だろう。理由は簡単、アイ

ツの能力を最大まで使つと、最凶最悪の魔獣「ジャバウオック」に変貌する。強力な熱を操り、どんな傷でも、0・00000000000123秒で回復する超再生能力。そして機械やエネルギーを取り込んだり、攻撃を受ければ受けるほど、戦えば戦うほど、結人の憎しみが強まれば強まるほど“力”は増していく。こんなのが、最強の吸血鬼と戦つたら、どうなると思う？俺も想像もつかん。だから、五分五分だと思ふのだ。

で、問題だが、恐らく、オリ主は結人にセイバーと同じ命令を下したのだらう。セイバー曰く、杯斗の魔力、魔術回路の質が良すぎて、どんな命令でも、聞いてしまう魔力があるそうだ。だから、結人もセイバーと同じ状況になったのだらう。

「キャスター、あの馬鹿は何処にいる。止めに行つてやる」

「わたしも分からない……。でも、マスターは今日の夜、穂群原学園を襲撃するみたい」

……マスターの学校を襲撃か。だったら、ちょうどいいな。俺の最後の舞台は、マスターが始めてサーヴァントに出会つた場所で終わるなんて、なんだか、展開的に面白いだらう？

死、終

マスターには、結人の事を話した。結果、穂群原学園に来ると予想されるバーサーカー退治に本格的に動くようだ。だけど、マスター達じゃバーサーカーは確実に倒せないだろう。あんな化け物、同じ人外が止めなきゃ、絶対に止められるはず無い。いや、オリ主なら、止められるな。と言うか、オリ主がやっていることって、間違いなく、悪役がやることだよな。羨ましいのか、羨ましくないのか。まあ、そんなことは、どうでもいい。

……… 今回も悪役になれなかったな。でも楽しかったのかね。俺は。マスターの為に動いたせいかな、なんだか自分自身が正義の味方になったみたいだな。尤も、あいつらみたいに、最低な正義の味方じゃなかったがな。今度、聖杯戦争に参加できたら、今度こそ悪役になろう。

「アヴェンジャー？どうしたんだ？」

「なあマスター、今までありがとよ。俺、今日で死ぬわ」

そう言ったら、マスターは啞然としたのか、口を大きく開け、ポカンとしている。そして気を取り直したのか、正面から何かを言うとして、唸っている。だから、俺はマスターの腹を殴って、気絶させた。そしてマスターを縛り上げ、庭の木に吊しておいた。こうすれば、この家の誰かが、マスターを助けてくれるだろう。

「さてと、恒川政利。最後の大仕事と行きますか」

そして穂群原学園に移動した。穂群原学園、マスター達が通う学園だ。マスターが始めて、サーヴァントを見た場所であり、全ての始まりの場所。この場所を守り、表の世界のマスターの居場所を守

咆哮と同時に、ジャバウォックは俺に突撃してくる。そして、その鋭利な爪で、俺の腕を斬った。切られた腕は空中を舞い、地面に落ちた。腕の感覚は無い。切られた表面は熱で焼かれており、血は出ていないのが、幸いだった。出血多量で死んだなんて、恥ずかしくないからな。再び、クロックアップをして、我が友の隣にを使い、裕猫を呼び出す。裕猫を放り投げ、クロックアップを解除する。

「はっ！」「はっ！」

■ ■ ■ ! !

「まさかのジャバウォック!？」

裕猫に気を取られ、別の方向を向くジャバウォック。だから、ジャバウォックの背に乗り、直接銃口を突き付け、撃った。靴の裏が焼ける。靴を通して、熱が足の裏にくる。だけど、ジャバウォックには、傷一つ着かなかった。











邪魔だと、言わんばかりに身体を大きく振り、俺を落とそうとしている。俺も下りる予定だったから、ちょうどいいのかも知れない。

「……………駄目だな。勝利の法則も、逃げ道も見つからない。まさに背水の陣ってか？はっはっは……………」

笑い声も、わざとらしい声しか、出ない。ホントに馬鹿な事したな。勝てない戦いをするなんて、馬鹿な事したよ。………最後は華やかで、終わらせようか。壊れた幻想。これなら、傷くらい付けら

れるだろう。

壊れた幻想を使うとしたら、クロックアップだけの方がいいな。我が友の隣に残しとくと、裕猫は残れるって、言うからな。嘘か本当か分からないがな。

「なあ結人、俺と一緒に地獄に堕ちようぜ」

俺の身体の奥底から、まばゆい閃光が放たれる。その閃光は半径10m程。そして目を開けると、俺は倒れてしまった。結人は、まだ立っているが、その瞳は虚ではなく、現実を見ているような気がする。

「兄……貴……？なんで……」

「……うるせーんだよ。頭が痛てえんだよ。お前を止めるために」

自分でも、何を言っているか分からない。呂律がはつきりしない。だけど、何か満足感があつた。

「アヴェンジャー！」

どうやら、マスターが来たようだ。その目は、俺が何をやっているのか、分からないと言う目だった。後ろには、凜とセイバー、アーチャーが来ていた。その全員もマスターと同じ目をしている。マスターは俺を抱き抱え、顔を見る。結人の声が聞こえた。

「………そっか。全部、思い出した。なあ兄貴、俺達、先に逝くよ。もう皆に迷惑かけたくないから」

「………結人君。また一緒だといいね」

そう言い、二人は互いの胸に腕を突き刺した。消えてゆき、それ

はまるで雪が溶けるように。俺も、あと少しで消えるだろう。

「…………マスター、色々と言いたい事があるけど、俺はマスターと一緒にいて楽しかったし、嬉しかった。最後は格好悪いかもしれないけど、これだけは言わせてくれ。マスターは自分だけの正義を貫いてくれ。誰かに正義を否定されても、認められなくても、馬鹿にされていても、笑われて泣きそうになっても、マスターは自分の正義を貫いてくれよ」

「アヴェンジャー！俺は！」

マスターは何を言いたかったのだろう。だけど、それがマスターに負担をかけない事だけを祈るのであった。

セイバーVSアーチャー、アサシンVSセイバー

気づいたら、気絶してて、縛られ、木に吊されていた。セイバーに助けてもらって、学校に急ぐと、そこにはボロボロなアヴェンジャーがいた。……そしてアヴェンジャーは、俺に正義の味方になれって、言って消えてしまった。

俺はじいさんの意志を継いで正義の味方になろうとした。でも大切な人を守れなくて、手を伸ばせば助けられるのに、手を掴めば、助けられるのに、俺はアヴェンジャーを見殺しにした。その手を握らないで、アヴェンジャーを助けられなかった。……くそつ。

「士郎、そんなに落ち込まないの。とにかくまずは、あの馬鹿を見つけ出さないと、アヴェンジャーも浮かばれないわよ」

「遠坂………へ？さつき士郎って」

「あんと私は、もう退けない所まで来てるのよ。だったら、衛宮君なんて他人行儀な呼び方、失礼と思わない？それとあんたも、私の事を凜って呼びなさい」

………何て言うか、もの凄く強引じゃないか？でも、何だか悪い気はしないな。なんか、俺達は一心同体って言うか、一緒に同じ道を歩んでるって感じで。

「ありがとな………凜」

「うん。それでよし」

その後、家で晩飯を食べて寝た。朝、起きたら朝食を作って、朝食を食べたら、学校に行く。三日間は安全に暮らせたし、聖杯戦争が始まる前の生活に戻れたような気がした。そして四日目の放課後、凜に呼ばれ、屋上に来てみると、そこには屋上から街を見ていた凜

がいた。その姿は何だか、綺麗で心臓の鼓動が早まっている事に気がついた。

「あら、来ていたの？だったら、声を掛けてよ。なんか、恥ずかしいじゃない」

「そうか、悪かった。でも綺麗だったぞ」

「はあ！？な、な、な、何言ってるのよ！？き、き、綺麗だなんて……」

……素直な感想を言っただけなのに、何で凜は、こんなにも動揺してんだろ。……翌々、考えてみたら、凄く恥ずかしい事言っていないか？俺。

ヤバイ。そう考えると、恥ずかしくなってきた。俺は顔を下げ、凜の顔を見ないようにする。凜も同じなのか、顔を下げ、俺の顔を見ないようにする。そして暫く時間が経ち、凜が顔を上げた。

「し、士郎。話を戻すけど、私達は杯斗と圧倒的に戦力差があるわ。杯斗は第六次聖杯戦争を起こしたって、アヴェンジャーが言った事、覚えてる？」

「ああ、アヴェンジャーが基本的に嘘だけは、着かないからな。信じて俺は良いと思う」

コレは本当に俺が思うことだ。アヴェンジャーは自分でも言っていたが、アイツは信じられる人間には、嘘だけは吐かないらしい。尤も、アヴェンジャーが俺達の事を信じているか、分からないけど。

「つまり杯斗は何処かで聖杯を見つけて、それを使って聖杯戦争を起こした。あの馬鹿の事だから、間違いない、何も考えてないわ。だからその隙を狙って、私達は杯斗を」

凜が続きを言おうとした瞬間、一本の矢が飛んでくる。その矢は、俺の頬を掠め、血をたりと、流させた。この矢は間違いなく、誰かが俺達を狙って撃ってきた矢だ。でもいったい誰が……。くそつ、無理矢理冷静に考えてみたが、何も思いつかない。それ所か、てんばつてるのか、驚く事も出来ない。

……今はこの冷静さに、感謝するべきなのだろうか？

「士郎！第二派が来るわ！避けて！」

「なっ！？矢が……。見えない……！？」

見えない矢？そんなものがありえるのか？透明化の魔術でも使つて、矢を隠している？それなら、可笑しい。親父が言うには、透明化の魔術でも、その存在は世界からすれば、それは矢だと、確定されているらしい。だからそれは矢だと、存在は感じる事が出来るでも、これはまるで『空気』のように、その存在を認知させない。

「くっ！」

空気を切る音も、存在も感じられない。だったら、一か八か、自分の直感に頼るしかなさそうだな。体を右にずらし、矢をかわす。すると、屋上のコンクリートを壊しながら、透明な矢は動きを止めた。この戦闘方法からして、敵は間違いなくアーチャーだ。このまじや、一方的に殺されちまう……。だったら

「遠坂凜が命ずる、アサシン、今すぐココに着なさい！」

「セイバー！着てくれ！」

凜の右腕が光ると、俺の右腕も光りだす。令呪の光が収まると、そこには二騎のサーヴァントがいた。一方は俺のサーヴァント、セイバー。もう一方は凜のサーヴァント、アサシン。そして二人は迫

り来る見えない矢を全て打ち落とした。

「マスター、凜、どういう状況ですか？」

「一言で言えば、いきなり敵が襲ってきた」

そう言ったら、納得したのか、セイバーは首を縦に振って、矢に構える。その姿は、まるで隙がなく、流石は戦場を駆け抜けた英霊と言えるだろう。

「うおおおおおおおおおっ！！！」

「「「「「！？」」」」」

突如、飛来してくる巨大な物体。間違いなくサーヴァントだ。たぶんクラスはセイバーだ。理由は1m50cmほどの巨大な剣を握り締め、こちらに向かってくるからだ。身長は2mを超えるんじゃないだろうか。そのサーヴァントは一直線にセイバーに向かって、剣を振り下ろす。それを見えない剣で受けとめ、弾き返した。

「はっはっはっはっは！！やるではないか！青いセイバー！」

「貴方はなんですか、いきなり戦闘を仕掛けてきて」

黒い鎧のサーヴァントは、未だに笑いを止めない。それどころか、さっきより大きな声で笑っている気がする。鎧のサーヴァントは再び、大剣を握り締め、セイバーと対峙する。

「待て、セイバー。こやつとは、縁があつてな。私に相手をさせてもらおう。お主はアーチャーの方を頼む」

「……分かりました。アサシン、この場を頼みます」

……俺はココに残った方がいいのか？……でも、もしもセイバー

に何かあったら……。……はつきり言つて、俺は役立たずだ。そんな俺でも、セイバーの役に立つ事は、出来る事はあるのか？

「セイバー、俺も着いていく」

「………駄目です。マスター、貴方がいると戦闘に集中できません。ココで待つててください」

「でも！「安心してください。私は絶対に戻ってきます」………」

そう言いながら、セイバーは笑った。その笑顔を見たら、なんとも言えなくなってしまった。

「……悪いな、セイバー。アーチャーを頼む」

そう言つと、セイバーはアーチャーの下へ向かった。

我が名は、彼の名は

迫り来る、透明な矢。それを全て打ち落とし、矢の軌道上にいる敵を討つ。これが私の考えた今現在最大限で活用できる戦法だ。それにしても、透明な矢か……。どうしても、彼の事を思い出してしまいますね。彼もこの矢の主と同じような戦法を使うので、対策は立てやすい。

恐らくだが、この矢の主は、彼では無いだろう。理由は簡単、彼の放った矢は全てが全て、必中の矢となる宝具を持っている。だが、この矢は打ち落とそうと思えば、打ち落とせる。だから、彼ではない。そんな事を考えている内に、アーチャーがいるはずのビルの上に着きました。

「……この辺りにアーチャーがいるはず……いったい何処に……」

次の瞬間、私の周囲に殺気を感じる。エクスカリバーで周りを切り裂く。理由は簡単、矢が飛んできたのだ。矢を打ち落とそうとするが、打ち漏らしがあったのか、一部の矢は私の体に直撃する。だが、そんな事で動きを止められては、いけない。そう思い、立ち上がり周りを見渡す。すると、巨大な樹木が真直ぐ、私目掛けて飛んできた。それをエクスカリバーで切り裂き、攻撃を回避する。

「あれ？あれを喰らって生きてられると思ったら、我が元主ではないですか。お久しぶりですね」

「………！あ、貴方は………」

私の目の前にいるのは、先ほど語ってた私の知り合い。その金色に輝く長髪、常に笑っている嫌らしい笑顔、その全てを私は知っている。

「ども、アーチャーこと、トリスタンです。宜しく願いしますね。アーサー王」

「……………貴方、全力を出さないんですか？弓矢に関しては、私よりも実力は上だと言うのに」

「ああ、マスターに禁止されているんですよ。まだ宝具を使うのをね。ひっひっひっひ……………」

彼の宝具、フェイルノーツ無駄無しの弓矢は如何なる物でも、矢として撃つ事ができ、その真名を開放することで、撃った物は全て必中り、全てがDランク宝具となる。しかも彼は接近戦もいける。槍での戦いは、パロミデス、ガレス、ディナダン、ガウエインを打ち破っている。……………もしかしたら、エクスカリバー約束された勝利の剣を使わないと勝てないかもしれないですね。

「じゃ、行きますよ！」

「……………」

トリスタンは矢をセットしていない弓を弾く。すると、空気が矢となり、私を殺そうと、迫ってくる。それを打ち落とし、トリスタンに近づこうとするが、彼は槍を片手に持ち、攻撃する。それを避けると、次の瞬間、また別の空気の矢が飛んでくる。

……………くっ。これでは、キリがない。フェイルノーツトリスタンは、この世界がある限り、矢切れの心配も無く、更に無駄無しの弓矢が壊れるかもしれないが、この世界の空間自体を矢として、一撃必殺の矢も発射も出来るから、本当に何が飛んでくるか分からない。因みに私の知る中で、一番印象的だったのは、数千km離れた場所から、フェイルノーツ無駄無しの弓矢を使い、恋人にラブレターを贈ったことだ。

「くっ！負けるかぁ！！」

「はっはっは！！遠距離戦は俺に勝てた事がないんだから、諦めた方がいいんじゃないか？アーサー王さんよお！！！」

何射も、何射も、何射も矢を打ち続けて、トリスタンは疲れないのか？こうなったら、トリスタンが矢を射る為に、一瞬だけ動きを鈍くする時、仕掛ける。コレなら、槍を取り出す、暇は無いだろうし、勝てるか？

「さてと、コレで……は？ちっ、分かったよ。もう止めれば、いいんだろ。おい、アーサー王、今回は逃げさせてもらうぜ。じゃあな」
「……………」

逃げられた……。トリスタンはまだ何か切り札があるみたいだし、これはラッキーだったんでしょ？……仕方ない、マスターの所に戻ろう。

士郎SIDE

その戦いは高度過ぎて、何がなんだか分からなかった。迫る鎧のセイバーの斬撃、それを紙一重でかわし、長い日本刀で鎧のセイバーを切り裂く。それを押さえ、アサシンを切り裂くが、避けられ、再び、刀で切り裂こうとする。だが、二度も効かなく、避けられ、頭を殴られ、吹っ飛ばされた。

「やるではないか……鎧のサーヴァント」

「はっはっはっは！！そりゃそうだな！この俺はセイバーなんだからな！オリヴィエも俺のクラスを知ったら、驚きの連続で顔が可笑しくなるかもな！！はっはっはっはっは！！」

「あら？そんなに情報を漏らしているのかしらね？オリヴィエと言ったら、中世ヨーロッパの人物……つまり、その名を出す貴方は中世

ヨーロッパ……しかも、その剣捌きから見て、オリヴィエと同じ、十二勇将の一人って感じがしら？」

……凄い。あんな僅かな時間で鎧のサーヴァントの特徴を見つけて、しかもそれだけで、真名を見破る一歩手前の所にいるなんて……。十二勇将の一人って事は……。

「ああ！そうだとも！小娘よ！我が名はローラン！偉大なる十二勇将の一人にして、シャルルマーニュ王の騎士の一人よ！はっはっはっは……！」

「あら？そのシャルルマーニュの命令を無視して、女を追っかけたのは、誰かしら？」

「ぐはっ！？それを言うではない！小娘よ！あれは恋。恋は盲目、恋は病、俺は治らぬ、不治の病に掛かってしまっただけなのだあ！アンジェリカ姫を一目見てみる！貴様でも、永遠の恋に落ちるぞお……！」

……なんつうか、テンションの高い人だな。寧ろ、テンション高すぎて、若干気色が悪い……。凜も引いているのか、若干顔が笑っていない。

「とにかく、アサシン。アイツを」

何かを投げる音がある。俺は思わず、凜の前に立ち楯になる。突如、胸に鋭い痛み。声が出ない、声が出せない。俺に刺さった物は鋭利なナイフ……いや、クナイだった。

「士郎！？あ、あんた……」

「む、小僧が死んだか。はっはっは！コレは愉快な！」

必死に生きるための方法を考えるが、体も、頭も、冷たくなる一方でも何とも思いつかない。そうか、俺は死ぬんだ。そう思いながら、目を閉じた。

暗殺者、異常者

私が気がつくと、士郎が壁になって、私を守っていてくれた。心臓をクナイに突き刺さり、血が止まらない。生暖かくて、気色の悪い感触。でも、それは士郎が守ってくれて、それが代償で……。やだ、自分でも何言ってるか、全然分かんない。何を言いたいのか纏まらない。私は何がしたいの？士郎はなんで私を守ってくれたの？分かんない、分からない、分かりたい。士郎、なんで貴方は私を守ってくれたの？お願い、答えてちょうだい。

「主よ！しっかりと戦場を見ろ！敵はまだいるぞ！」

「……………興が冷めた。アサシンツ！何故、このような事をしたツ！俺はそのような事を命じた覚えも、マスターがお前に命じた覚えも無いぞお！」

「……………仕方ないでしょ。戦況的に貴方の方が不利。しかも相手は絶対無双の魔剣、燕返し、の佐々木小次郎。下手をすれば、貴方は死んでいたわ。それは私と主の目的がまた一歩下がってしまうわ。それは忌々しき事態。それを防ぐのは、当然中の当然でしょ」

突如、現れたのは、黒い髪を布で纏めた少女。その身軽そうな身体で立っている。その手には、血塗られ、真っ黒になっているクナイ。それで士郎を殺したのだらう。そんなことは今はどうでもいい。逃げる事を、逃げ切って生き延びる事だけを考えないと。

「アサシン……………撤退よ。士郎を抱いて、連れてきて」

「……………御意」

アサシンは小さく頷くと、私と士郎を片手に抱いて、逃げていった。

「ココは……。何処だ？確か、俺はクナイを投げられて……。それで……。ああ……。俺は死んだのか。それにしても、ココは何処だ？まさか……。ココが天国？確かに部屋は真っ白で何も無いし、そうなのかもしれないな。そう思い、立ち上がってみると、世界が変わった。そこは孤児院。沢山の子供。その中で一際、異質な奴がいる。その少年は身体は擦り傷だらけ、アザだらけ。その目は虚ろで、この世の全てを憎んでいると、語っているような眼だった。

「■■君、君のお父さんとお母さんを殺した悪い人の裁判が始まるよ」

「……………その人、おとーさんとおかーさん殺してない。……………ボク、守ってくれた……………」

少年の言葉など気にせず、女の人は少年を抱きしめ、テレビの前に移動させる。テレビには、何かの裁判がやってるみたいだな。

「被告、■■堂■■成。貴方は2001年の■■一家殺人事件の犯人、2002年の■■氏殺人事件、2003年の全■■■■市民毒殺事件、全■■■■県民毒殺事件県民、2004年の■■総理大臣暗殺事件、そして今回の■■家殺人事件の犯人だと認めますか？」

「……………どうせ、証拠は作られてんだ。否定するだけ、馬鹿がやることだろ。認めてやる」

——証拠は作られただど！？私達を馬鹿にするな！——

犯人の言葉に裁判を見ていた警察官が騒ぎ出した。喧騒的で、嫉妬のようで、怒りのようで、殺意のようで、それでいて何か寂しい感じがする。…………あれ？なんでだ？なんで俺は泣いているんだ？無

く理由なんか無いはずなのに……。……この子も泣いてる。まるで俺とこの子は魂がシンクロしているように……。……そうか、この感じ、どこか似た感じ……。この子はアヴェンジャーだ。凜が言っていた。英霊も元は生きていたもの。生きていた記憶もあるんだと。つまりこの夢はアヴェンジャーの生前の夢か。

「判決！ 藤 ■ 成！ 貴様を死刑を下す！」

「……………分かった、ただと少しだけ猶予をくれ。会っておきたい子がいるんだ」

そして世界は変わる。夢ではなく、現実。

「……………ココは……………」

「あら？ 目が覚めたの？」

……………凜？ なんて……。確か、俺は屋上にいたはず……。それで確か……。ああ、俺は殺されたんだ。でもこうして、俺は生きている。傷も跡は残っているけど、掠り傷一つ無い。凄いな、これは凜がやったんだろうな。

「にしても、よく生きてたわね。あんたの身体、どうなってんのよ。魔術的な回復のはずだけど、ルーン魔術？ それとも……………」

「ありがとうな、凜。俺の傷を治してくれて」

「へ？……………そうね、そういうことにしておいて。私もよく分からないから」

……………よく分からない？ これは凜がやったことじゃないのか？ それじゃあなんで……………俺は『生きている』んだ？ あの時、俺はクナイに心臓を刺されたはず……。……………分からない。まあ、仕方ない……………のかな？

「それより、士郎。あんたはどんな魔術が使えるの？それと工房があるなら見せてくれない？」

「へ？分かった。着いてきてくれ」

立ち上がり、工房に行く。それを凧が着いてくる。えつと……俺が使える魔術は、強化と投影だよな。……尤も、強化も、投影も、ちゃんと扱えているかは、別の話だけど。

「強化と……一応、投影が少しくらいなら、使えるぞ」

「そう。なら、多少は使えるわね」

………なんだろう。妙な寒気が一瞬だけ感じたんだが……。まあ、凧だつて、普通の人間をサーヴァントと戦わせるなんて、そんなに鬼じゃないだろうし。そして暫くすると、工房に着いた。

「——士郎。コレは何？」

凧が指差し、手に持ち上げたのは、気晴らしに作ってみたガラクタ。投影魔術の出来損ないだ。それは外側しか再現できなく、中身が一切無い本当のただのガラクタでしかない。なんで凧はそんなどうでもいいモノを手にして表情を凍らせてるのだろう？

「ああ、それか？強化の練習ついでに創った投影の出来損ないだ。別に、そんな物、大した事は無いだろう？」

「何言ってるのよ！こんな決して有り得ない物を創っておいて……！大したこと無いですって！？」

思わず、激高しかけている凧。俺はどうすればいいのかわからないので、あたふたしていると、凧は冷静さを取り戻すために一つ深

呼吸をすると、怒りを押しこめたのように淡々と言葉を紡ぎ出す。

「いい？世界と言うのは矛盾を極度に嫌う物なの。例外とすれば、今日戦ったアーチャーの宝具のように空気を矢として打ち出す物なら、それは矛盾ではないから、世界はそれを空気と認める。でも、魔術においては例外じゃない。魔力によって創りだされた物は、所詮擬似的な偽者。すぐに魔力は気化して創りだされたモノは消え去ってしまう。けれど、貴方の作り出したモノは喪失しない。ソレは、現実を侵食する想念に他ならない」

言葉の意味は、よく分からないが、取り敢えず、俺は有り得ない事をしていたらしい。世界の法則を乱し、世界の現実を侵食する。それがどのような事かは、分からないが、凜はそれが許せないらしい

「後、一つだけ言っておくわ。人間には大きく分けると二系統二属性が存在する。創る者と探る者、使う者と壊す者。士郎、貴方は《創る者》よ。それだけは覚えておきなさい」

それだけを言うと、凜は背中を向けたまま足早に土蔵から立ち去って行った。……正直、凜の話はあまりよく理解できない。けれど、今の話は決して忘れてはいけない事だと、俺……衛宮士郎の本質が告げていたのが分かった。

暗殺者、異常者（後書き）

一応、サーヴァントは全クラス完成したので、オリサヴァ募集は終わりにします

士郎、杯斗

さてと、そろそろ学校に行く時間だな。それにしても、今日も桜は来なかったな。今日も含めて、一週間か……。やっぱり、何かおかしいよな。学校で桜を見てるから、風邪じゃないだろうし……。今日、桜に直接、聞いてみるか？でも、なんか桜に失礼だな……。

「すみません、衛宮さん。お話があるんですが」

「あ、はい。今出ます」

玄関から聞こえたのは、中年男性の声。たぶん宅配便かなんかだろう。そして玄関を開けると、そこにはびつちりとスーツを着た小太りの中年男性が一人と痩せ細った若い男性が一人いた。そして、その手には警察手帳と堂々と書かれた手帳を俺に見せてきた。

「警察の者です。少し、お話をいいですか？」

俺は首を小さく縦に振り、家の中に入れた。その事に凜も気づいたみたいで、何だか警戒している。セイバー達には、姿を隠すように言つて、警察を居間に通した。他に人がいるなら、その人にも話を聞きたいと言われたので、凜も呼ぶ。凜は何だか、イラつきながら居間まで来た。

「えっと……お二方は同棲してんですか？」

「おい、大田、そんな事聞くんじゃない。失礼だぞ」

大田と呼ばれた若い刑事は小さな声ですいませんと謝ってきた。中年の刑事は改めて、俺達の方を向き、話をしようとする。そして胸ポケットから、一枚の写真を取り出し、俺達に渡してきた。そ

の写真に写っていたのは、——間桐慎二、彼だった。

「……………突然ですが、間桐慎二さんが昨日、新都の真山ビルで殺されているのが分かりました」

「……………！」

慎二が死んだ？ いったいなんで？ 確かに、アイツは男子や女子、後輩に嫌われるようなことをした。でも、なんだかんだ言って、アイツは優しい奴だ。そんなアイツがなんで……………。……………話が急すぎて、涙も出ないや。

「間桐さんは惨殺死体で発見され、近くには、犯人が書いた血文字で衛宮士郎に告ぐ、2月12日の00時00分に新都の荷六ビルの屋上に来るようにと書かれてありましたが、犯人に心当たりはありますか？」

「いえ、荷六ビルなんて、ついさつき知りま「すいません！ さつき荷六ビルっていいましたか！？」 え？ り、凜？ どうしたんだ？」

凜が驚いたような、怒っているような声で大田と呼ばれている若い刑事の目をじっと見る。大田さんはビクビクとした声で、それでいて凜を恐れているような声。俺は凜を止める為に凜を羽交い絞めして、大田さんから離れた。

「い、い、い、いったいどうしたんですか？ 取り敢えず、荷六ビルには、警察の関係者が包囲してますから、犯人が捕まるのは時間の問題だと思えますよ……………」

「……………今すぐ、撤退する事を勧めますわ。彼は貴方方が止められるような人物ではない」

彼……………。凜は、いったい誰のことを指しているんだ？ 可能性とし

て高いのは、杯斗だろう。と言うか、杯斗以外に考えられない。もし、杯斗が犯人だとすると、なんで慎二を殺したんだ？慎二とは、仲がよかったとは、言えないけど、そこまで仲が悪かったとは言えなかった。杯斗も、護りたい誰かがいるのか？それに慎二が手を出したから、殺したのか？くそっ、分かな過ぎる。犯人は杯斗なのか？

「では、私達は帰らせてもらいますね。それと撤退はしません。衛宮さんも、殺人犯の誘いに乗らないでくださいね」

「は、はい……」

そう言っ、中年刑事は頭を深く下げて、一礼してから、部屋から出て行っ。その後、大田さんも頭を下げて、一礼して出て行っ。

「凜、どうしたんだ？いきなり大きな声だしたりして」

「……荷六ビルは、私と杯斗がよく遊んでいたビルなのよ」

「ビルが遊び場？と言うことだ？」

純粹な疑問を聞いてみた。ビルが遊び場なんて、普通はありえないからな。凜は、困ったような顔をして、俺の顔を見る。

「正確には、荷六ビルじゃなくて、荷六ビルができる前の空き地でよく遊んでいたのよ。それで反応にしちゃってね。それより、勿論、荷六ビルに行くわよね、士郎？」

「ああ、勿論だ。犯人は俺を指名してきたんだ。犠牲を出さない為にも、俺は行く。凜は家で待っていてくれ。何かあったときの対処を頼む」

「嫌よ。いい士郎、私とあんたは同盟を組んでるのよ。それに今回の犯人杯斗かもしれないんだから、私がいけないとカッコがつかない」

いじゃない」

……やっぱり、彼は杯斗の事を指してたか。とにかく、情報を整理しよう。杯斗は何処かで聖杯を見つけて、新しく聖杯戦争を始めた。俺達が持つ情報だと、アヴェンジャーみたいな特異的なサーヴァントは見当たらない。勿論それは、まだ俺達が知っていないだけかもしれないけど。次に、この聖杯戦争では、バーサーカー、キャスターは倒された。尤も、それは限りなく自殺に近い感じだが。そして俺達の知る中で発見できたクラスはアーチャー、セイバー、アサシンの三騎。残りのランサー、ライダーは不明。更に、その中のセイバーとアーチャーのサーヴァントの真名は分かっている。セイバーの真名は十二勇将の一人、ローラン。アーチャーの真名は円卓の騎士の一人、トリスタン。アーチャーの真名はセイバーからの情報だ。セイバー曰く、アーチャーから自分の真名を教えてくれたらしい。ホントに有り得るか、分からないが、今はセイバーの言葉を信じるのが、妥当だろう。

と、もうこんな時間か。そろそろ学校に行かないと、間に合わないかな。少し、早歩きで行けば、十分に間に合うだろうけど、速めに行くのに、越した事は無い。時は金なりなんて、諺があるくらいだしな。

「とにかく学校に行こう、凜」

「……………ええ、そうね。」

凜と共に学校に行くと、そこには弓道部の練習が終わったばかりであろう桜がいた。その隣には——杯斗がいた。その顔はニヤついていて、何もかも理解したと、言いたげの表情だ。

「杯斗……………！なんでアンタがその子と……………」

「いいじゃねえか、遠坂。実はこの頃、俺と桜は付き合いはじめた

んだ。なあ桜」

「はい、そうですよ。それと遠坂先輩、安心してください。私は衛宮先輩に手は出しませんから」

衛宮先輩？……やっぱり、なんかしつくりと来ないな。出来れば、魔術師ではない桜は、魔術師である杯斗と付き合っただけでいい。それに慎二を殺した可能性がある杯斗とは、付き合っただけでいいかな。つたけど、桜が認めたならそれでいいのかな。

「……行くわよ、士郎。じゃあね、獅子王木さん、間桐さん」
「あ、おい！待てよ、凜！」

そういい、俺は杯斗と桜と別れ、凜を追い掛けたのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4669u/>

Fate/stay night とある悪役の話

2011年11月5日03時11分発行